

パチュリーさんは現代の家で居候しています。

閏 冬月

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

パチユリー好きの現代の人の家に、パチユリーさんが居候するだけのお話。

目次

1話	パチユリーさんは現代入りを果たしました。	1
2話	パチユリーさんは無事に目を覚ましました。	3
3話	パチユリーさんは現代の技術に興味があるそうです。	6
4話	パチユリーさんは外に出るそうです。	9
5話	パチユリーさんはスーパーに初入店しました。	12
6話	パチユリーさんはインスタントに打ちのめされました。	15
7話	パチユリーさんはハウスダストにも弱かったようです。	18
8話	パチユリーさんよりも小悪魔さんの方が苦労人だったそうです。	21
9話	パチユリーさんに対しての不安がありました。	24
10話	パチユリーさんは多数の属性を持っていそうです。	27
11話	パチユリーさんはラフな服装が似合うと思います。	29
12話	パチユリーさんとの生活が2日目に入りました。	32
13話	パチユリーさんを家に置いてきて良かったのか不安です。	35
14話	パチユリーさんの命令の遂行は明日ということ。	39
15話	パチユリーさんはパソコンの扱い方を覚えました。	42
閑話	パチユリーさんはチョコを作ることにしたそうです。	46
閑話	パチユリーさんはホワイトデーのことを知っていたのでしょ うか。	51
16話	パチユリーさんには嘘はつけない体質の主人公です。	

17話 パチュリーさんと主人公の間に本日限りの主従関係が成立しました。

18話 主人公はパチュリーさんへの気持ちを考えてみました。

閑話 パチュリーさんと共に聖夜を過ごしました。

19話 パチュリーさんはどんな服を着ても似合っています。

20話 パチュリーさんの頼みごとをしていないことに言い訳はありません。

21話 パチュリーさんの依頼を遂行します。

22話 パチュリーさんの事情を話す前に警戒されるのは当然のことです。

23話 パチュリーさんの元へ董子さんを連れて行きます。

24話 パチュリーさんと董子さんのよく分からない会話には参加しないようにしましょう。

25話 パチュリーさんとの久しぶりの他愛のない会話です。

26話 パチュリーさんは体育祭という行事に興味があるそうです。

27話 パチュリーさんにカツコ悪いところは見せたくないのです。

28話 パチュリーさんは最近の主人公の帰りが遅いことに苛立ち

があるそうです。

29話	パチユリーさんに嫌われているかもしれません。	99
30話	パチユリーさんと仲直りがしたいです。	102

1話 パチユリーさんは現代入りを果たしました。

「煉、紅茶を淹れて」

「分かりました」

「茶葉はダージリンでお願いね」

「パチユリーさん。紅茶の茶葉、昨日でできたっばいです。麦茶でいいですか？」

動かない大図書館ごと、パチユリー・ノーレッジさんはパソコンを見ながら唸った。

どうやら今日は紅茶の気分だったらしい。けれど、買いに行くことも出来ない。

今は午前1時。コンビニがこの家の近くに無く、近くにあるのは、午後11時に閉店するスーパーが2、3軒。

「むう。仕方がないわね。ちようだい」

「承りました」

なぜ、こんなところに東方projectの登場人物である、パチユリー・ノーレッジさんがいるのかは、1週間ほどまで遡る。

1週間前、ただインターネットで東方project原作の2次創作を見ていた。

この2次創作物は俺の大好きな紅魔館グループをメインとした物語だ。紅魔館の中だったら咲夜さんとパチユリーさんが好きだ。そんな個人の好みなんていらなないけれど。

これは面白い！

そう思った俺は、徹夜での読破を企んだ。

読んでいる媒体はノートパソコン。寝転びながら読むにはとても嬉しい。デスクトップはデカいから。

布団を敷くために、押入れを開けた。

その時、後ろからこの世とは思えない音が聞こえた。

後ろに振り向くと、天井から落下しているパチュリーさんを見た。ドサツと音を立てて床に落ちると、目を回していた。

俺は何が起こったのかなんて分からない。ただ、救命しないと、と思った。

そして、神様ありがとう！と思った。

「だ、大丈夫ですか？」

目を回しているのだ。大丈夫なわけがない。

とりあえず布団を敷いて、パチュリーさんを寝かせようとする。

今は、無理に動かさない方が良さのだろうか。

それなら、どうやって動かそうか。おんぶは危険、転がすのも危険。なるべく体勢を変えない運び方…。

それはすぐに思いついた。そう、お姫様だっこの形だ。

それは途中で起きてしまえば、俺自身の社会的死が待ち受ける。しかし、冷たいフローリングの上で寝かせておくのも、俺のパチュリーさん好きの精神が死んでしまう。

悩みに悩んだ末、お姫様だっこの布団まで運ぶことに決定した。

持ち上げると、ゆったりとした服装に見合わず細い体が腕に当たる。

何この子守りたい。

そんな呑気なことも考えられる暇もなく、すぐに布団の中に潜らせた。

案外、早くに寝息が聞こえてきたので、安心して自分のソファアへと向かった。

パチュリーさんの寝顔は可愛い。確信が出来る。

「……。飲まず食わずで、不眠不休だったとしても、パチュリーさんの寝顔だけで一カ月は生きていけるかもしれない」

ガチでそう思った。

2話 パチユリーさんは無事に目を覚ましました。

「んむう?」

目を覚ますと、見慣れない天井が見えた。

紅魔館の中ではない。

起き上がろうとするも、身体の節々が痛い。いつものベッドでもないらしい。

なら、ここはどこなのだろうか。

「あ、無事に起きたんですね」

その疑問を氷解させることの出来る者なのだろう。

しかし、寝顔を知らない男に見られていたという事実が私の冷静な判断を鈍らせていた。

とりあえず、叫ぶ。

「イヤアアアアア!」

「落ち着きましたか?」

「え、ええ」

落ち着いてなどいない。

こんな見ず知らずの男に寝顔を見られていたのだ。

今いる場所に関しては、ある程度推測が立つ。

見たことのない機械や、私でさえ聞いたことのない本のタイトルがこの場所の一部に集約されている。

おそらく、ここは幻想郷の外。

そう私は推測した。

「ええつと、ノーレッジさんはどうしてこんなところにいらつしやるんですか?」

「私が聞きたいわよ。昨日の夜に滅多に襲われない睡魔に襲われて眠って、気がついたらここよ」

嘘などついていない。

というよりかは、この人間が私の、幻想郷のことを理解出来るかどうか解らない。十中八九理解出来ないだろう。

「捨虫の術を身につけているのに、ですか」

「え？」

なぜ魔法使いではない彼が捨虫の術を知っているのだろうか。

「ノーレッジさんは紅茶がいいですよね？」

「何故、そんなことまで？」

「あ、いやその……」

彼は言い淀んだ。私が紅茶しかあまり飲まないのは、この人間に言っていない。

なぜ、それを知っているのか。

その時にはすでに、私の知識欲がそちらへと向かった。

「うーん、なんと言えばいいんでしょうか。こちらの世界には、貴女方をモデルとしたゲームがあるんです。」

そのせいでノーレッジさんや貴女の親友のレミア・スカーレットさん、その妹君であるフランドール・スカーレット嬢も知っています」

「そこまで……」

とりあえず、私はこの外の世界について考えるのをやめた。

私たちは幻想郷という結界の中にいたはずなのに、訳が解らない。

パチュリーさんに東方 project について、話すのはなかなか難しい。

だって原作キャラだもんね。仕方ないね。

「紅茶は……別にいいわ。紅茶じゃなくてこちらの方での名産物とかないかしら」

「こちらの世界の名産物？」

そんな物はない。それを言うならば幻想郷の方が名産物がある気がする。

そんなことを考えながらも、必死に幻想郷に無くて、現実にある物を探す。

そしてそろそろ、頭がパンクしそうになった時、パチユリーさんは俺の後ろにある物体を指差した。

「あれは何かしら」

パチユリーさんの細い指が指した場所には、ノートパソコンがあった。

「気になるのだけでも」

「あ、それでは見てみます？」

「ええ、お願い」

3話 パチユリーさんは現代の技術に興味があるそうですね。

「これは、パソコンというものです」

「ぱそこん？」

パチユリーさんが、首を傾げた。

本当にキョトンとしている表情だ。可愛い。

「僕でもよく分からないんですけど、インターネット空間に干渉する機械です。このインターネットで調べものを調べたり、すぐにメッセージが相手に届くという現代の技術の産物ですね」

「へえ、前魔理沙が大図書館に持ってきた物の小さい物と言っても大丈夫そうね」

あ、そんなことがあったんだ。

そのようなことを考えると、パチユリーさんはまた違うものに興味を持ち始めた。

「貴方が持っている、その小型のものは何？」

「これは携帯電話、スマートフォンっていう物です。ここから電波を送ってもう1つの電話に自分の声を届けたり、文を送ったり出来ます」

なんだか、パチユリーさんがそれを渡せ、と言っているように見えるほど手を伸ばしているの、渡してみることにした。

魔法の器具だと思っているのだろうか。

パチユリーさんはスマホを裏返したり、無理矢理分解しようとしていた。

パチユリーさんがいくら非力と言えども、魔法で身体を強化されたら流石にスマホが壊れるだろうと思っただが、全くそんなことは無かった。

「……貴方の言っていることがよく分からないわ。一度実演してみなさい」

実演って。

とりあえず、パチユリーさんにスマホを預けて、自分は家にある、固定電話の子機を持って、外に出た。

パチユリーさんにはきちんと、電話がかかってきたら、どう反応すれば良いのか、教え済みである。

アドレス帳から自分のスマホに電話をかけた。

こんなことに固定電話を使うなんて、思いもしなかった。

俺の固定電話の使い方もあまり良いものではない。スマホが見つからなかった時、電話をかけて、音で場所を特定するという使い方だ。

『……ねえ』

「あ、ノーレッジさん、繋がった？」

『ひゅい!』

パチユリーさんは大きく驚いたようで、変な声をあげていた。

なあ、なんでこんなにパチユリーさんは可愛いんだ？ 俺を尊死させるつもりなのだろうか。

『なんでなのかしら……。魔法でもこんなことをするのに結構な時間が必要なのに』

「幻想郷なら河童が作ってそうですけど」

『河童は技術を提供しないのよ。私たちの方があの技術を活用出来るのにね』

妖怪の山に住んでいる妖怪達は縦社会になっているとか、聞いたことがある。更には排他的だとか。

そう考えると、技術を教えない理由も分かる。

しかし、東方茨歌仙の万歳楽の時に歌仙さんに結構協力的だったよ
うな気がする。

妖怪の山の社会は俺のような凡人では理解出来ないのかもしれない。
い。

外から戻ると、パチュリーさんは冷蔵庫の中にあつた、麦茶を、グラスに入れて優雅に飲んでいた。

「何をしてるんですか……」

「おかえりなさい」

パチュリーさんにおかえりと言ってもらえて、このまま死んでしまつても良いぐらい嬉しい。

「そういえば貴方、ノーレッジって呼ぶのが呼びにくそうね。パチュリーって呼んでちょうだい」

「ありがとうございます。それじゃあ、これからパチュリーさんって呼ばせてもらいますね」

「呼び捨てでいいと言っているのに……」

4話 パチュリーさんは外に出るそうです。

「ねえ、貴方の名前ってなんと言うの？」

「あ、言ってますでしたね。俺は榊原 煉です」

「そう、じゃあ私は煉って呼ばせてもらうわね」

パチュリーさんから下の名前、他の国の人っぽくいうならば、ファーストネームを呼び捨てで呼ばれる。このことで俺は少し舞い上がった。

これだから童貞は。とかいう声が聞こえてきそうな気がするが、考えてみたら分かる。

好きな人(二次元)が自分の家の中に現れているんだぜ？そして、自分の名前を呼んでもらえる。

嬉しいだろうが。

「スキマも開く様子は今のところ無いし、このまま住まわせてもらおうかしら」

……。

俺、今日死ぬかもしれない。

そんなことを考えながら、昼ご飯の時間となっていることを確認。

今の状態では1人で一カ月を過ごせるほどの備蓄しか無く、今日は月末のため食料は備蓄もほとんど残っていない。そのため、パチュリーさんの分は無いに等しい。

「少し、外に食べ物を買に行くんですけど、パチュリーさんはどうします？」

「外……私も行くわ。暫くはこの厄介になるんだし、周りのことぐらい分かっておかないといけないから」

というわけで、パチュリーさんも同行することになりました。

「ハア、ハア、ハア……」

うん、予想が見事的中。

パチュリーさんが外に出ると言ったことからこのことは、ずっと予想していた。

家から出て、2分でこの状態。大図書館って暗いイメージだったから、6月末で、梅雨明けの夏のこの直射日光はしんどかったのだろう。

「良かったら、おぶりましょうか？」

「そろ、そろ限界ね。お願いするわ」

何この至福のひととき。

俺にとつては、幸せの何物でも無い。

その時、少しだけ引つかかることがあった。

パチュリーさんは魔法が使えるはず。それで風を起こして、身体を浮かせて前に進むことが出来るのでは？

「パチュリーさん、魔法って使わないんですか？」

「使いたいのだけれども、こっちの世界に来てから一切使うことが出来ないのよ。何度か使おうとはしているのよ？」

例えばけーたいとか言う物を分解しようとしたときとかね。と少し微笑んだが、俺にとつては今の生活においてかなり重要なものが全て壊されていた可能性があるという恐怖でしかない。

「よっこいせつと。あと、2〜300mも歩けばスパーにつくので暑いのは少し我慢してくださいね」

「善処するわ」

少し進むと、周りからの視線が妙に刺々しくなっていることに気付いた。

何故だ？そんなことはすぐに分かった。

だって、一昨日ぐらい前まで、俺もそうだったのだから。

そう。その視線の発信源は非リア達の妬み、嫉み、恨みなどの物だ。視線を向けていると思われる人に向けて、勝ち誇ったような視線を

送ると、目を逸らされた。

「というか、あの人が近所さんだ。」

「なぜ、ご近所さんが非リアの視線を浴びせるとか意味が分からない。」

「煉、どうしたの?」

「いや、何もないです」

「パチュリーさんにとっては何も無いことなので、早足でスーパーへと向かった。」

5話 パチユリーさんはスーパーに初入店しました。

「なんて涼しいの……!」

スーパーのドアが開くと、パチユリーさんの口も開いた。

そして、言った言葉が涼しい。

やはり現代の技術は進んでいるのだろう。

俺はパチユリーさんをおぶったまま、ずんずんと食料品売り場へと向かって行く。

「パチユリーさん、何食べたいですか?」

「そうね、久しぶりに刺身でも食べようかしら」

紅魔館ではそんなものも出ていたのか。

俺の中での紅魔館は、洋食ばかり出ていて生魚を食べるのは宴会の時ぐらいだと思っていた。

刺身を一から作る技術などは一切、持ち合わせていないので、鮮魚コーナーで刺身を買うことにする。

あと、パチユリーさんのために紅茶も買っておいた方が良さだろう。

「ねえ、煉。そろそろ降ろしてくれないかしら」

「そうですね。涼しいですし」

パチユリーさんが降りた時、結構残念に思ったのは内緒のお話。

鮮魚コーナーに到着。刺身は根こそぎ無くなっていた。

刺身が無ければ、寿司を買おう。

「お寿司でいいですか?」

「良いわ。生魚が食べたかっただけ」

この時、少し違和感があった。

パチユリーさんは生粋の魔法使い、それなら食欲なんて湧かないはず。

魔法が使えなくなったとは、さつき言っていた。もしかして、捨虫の魔法まで使えなくなっているのか。

少し聞いてみよう。

「今って捨虫の術でしたっけ。それって使えるのですか?」

「普通の人間と同じよ。多分、煉より力が弱くて体力が無くて……」
あ、少し落ち込んでる。

魔法使いが魔法を失ったらこうなるのか。

「けれど、時間の流れが一気に解放されるわけではなさそう。そう
なったときは私は一気に老けることになるわね」

「パチュリーさんはいくつになっても可愛い方だとは思ってますけど
ね」

「そういえば煉、こちらの世界に私たちをモチーフにしたゲームがあ
ると言ったわね。もしかして、貴方は私のファンなの？」

ド直球。

何も恥じることがないとも言わんばかりの、言い方だった。

幻想郷の人を全員知ってる訳ではないが、ほとんど人は少しは躊躇
うだろう。しかし、ここにいらっしやる方は何の淀みもなく聞いてき
た。

これが異変を計画する者に必要な器なのだろう。

「はい、パチュリーさんのファンです。紅魔館の人たち全員が好きで
すが、1番はパチュリーさんしかいないですしね」

「そ、そう？」

パチュリーさんは少し顔を紅く染めて、ありがとう。と言ってくれ
た。

そのような反応を見せていただき、本当にありがとうございます。

「ねえ、煉は料理を作らないのかしら？」

「出来ないことはないのですが、刺身やお寿司を一から作るの
は出来ませんね」

「咲夜とは大違いね」

あのスーパーメイド長と一緒にされては困ります。

あの人は規格外すぎて、働かないと死ぬとかそんなことを平然と
言っているそう。あ、これ社畜のことだ。

ともかく、あの人と比べられたら絶対にほとんどの人は格段に下の
人間になってしまいます。

「……そろそろ帰りたいわね」

「どうかしましたか？」

「なんだか、周りの人間から痛い視線が注いでいるのよ」

あ、多分それ、俺のせいです。

「それでは、お寿司を買ってから帰りましょうか」

「なるべく早くお願いね」

6話 パチユリーさんはインスタントに打ちのめされました。

お寿司2人前を手を取った時、パチユリーさんにTシャツの裾を引つ張られた。

どうしたのかと思って振り向いた。

そして、パチユリーさんは何を言いたいのか。見ればすぐに分かった。

パチユリーさんの指が指しているのは、インスタント麺のコーナーだった。

「気になるんですか？」

「ええ。あんな袋や容器の中に入っているものだけで、あんな料理が出来るとは思えないもの」

あんな料理というのは、カップ麺や袋麺に描かれているイメージ画像のことだろう。

あの見た目のものが出て来なければクレームを言うのかな？

「買いますっ？」

「お願い」

仰せのままに。

パチユリーさんの要望に応じて、卵とお寿司と米に加えて即席ラーメンも買うことにした。

米は来月まで保つだろう。パチユリーさんは多分、少食だろうと予想している。

レジを通した時にレジの人が横にいるパチユリーさんのことを再度見したことは言わないでおく。

「パチユリーさん、OKですよ」

「それじゃあ帰るわよ」

パチユリーさんにはカップラーメン一つとお寿司2人前が入っている袋を持ってもらうことにした。

パチユリーさんがいつ倒れても大丈夫なように手を繋ぐためだ。

一種の幸せな時間だ。

この幸せな時間を打ち壊す者は万死に値する。いや、万死では物足りん。億死に値するだろう。それでも足りるか不安になる。

「煉、何を考えているのかしら」

「パチュリーさんとの時間を打ち壊す者は死刑宣告を受けても問題ないなって思っていました」

「何その馬鹿みたいな理論」

あなたに比べると誰でも馬鹿でしょうよと言いたい気持ちをぐつとこらえて、パチュリーさんの歩くペースに合わせて歩く。

パチュリーさんは頻りにインスタント麺に目線を送っており、よほど気になるのだな。と感じることが出来た。

そういやお湯ってあつたっけな。

まあ、沸かすか。

家に帰ってくるなり、いきなりパチュリーさんはインスタントラーメンを開けようとして、唸っている。

しかし、魔法を使うことの出来ないパチュリーさんは非力なもので、袋を開けることが出来ず、結果俺が開けることになった。

「魔法が使えないのは不便なものね」

パチュリーさんはソファアに座りながら、そんなことを言った。それに関しては使えないが同感である。

移動では魔法を使っていたのに、いきなり徒歩になると、体力不足が目立ってしまう。

というかジャンクフードを食べて、パチュリーさんは更に体力が低下しないのだろうか。

「吐きそ……」

「ここでは吐かないでくださいね」

パチユリーさんは勢いでインスタントラーメンを食べました。その時のパチユリーさんは美味しい！って言いながら食べてたので、後悔はしてなさそうで。

「煉、お手洗いはどこかしら」

「廊下の右側にある扉です」

「ちよつと失礼するわ……」

今度からパチユリーさんにはなるべく体に優しいものを買わないといけないな。

そう思った俺であった。

7話 パチュリーさんはハウスダストにも弱かったようです。

「ねえ、煉。話があるのだけれど」

「はい？なんですか？」

パチュリーさんがこのように指示することってあるんだ。

この考えはとても失礼なことだとは思っている。

ただ、俺が読んでいる二次創作では小悪魔に向かって、上司命令しているような人だったから。

そして、その小悪魔は張り切ってその仕事をこなす。あの小悪魔のキャラはDMだったのだろう。

いや、今はそんなことはどうでも良い。

「煉、私はもう一切外に出ないわ。さっきの外出で私はもうこの世界には適応出来ない身体なのだわ」

「いやなんで、悟った風に言ってるんですか。体力が足りないだけなんで、散歩とか、家の周り一周するだけでも体力つきますから」

パチュリーさんは大きく驚いた顔を見せた。

まるで、そんな方法があったなんて！とても言いたそうな表情だ。

魔法のことやその他のことに対しての知識しか無さそうさ。

小悪魔さん、上司にこき使われる社畜だったのだろう。今は鬼畜上司のパチュリーさんはこちらにいますよ、小悪魔さん。

心の中で小悪魔さんへと敬礼を送る。

「けど……日光にも弱いし……」

パチュリーさんは言い淀みながら、両手を胸の前で合わせて人差し指をくるくるさせる。

何この可愛い生物。

「ある程度は俺も付き合いますんで、少しずつ体力つけていきましょ？」

「ありがとう、煉」

そう言って、パチュリーさんは笑顔を少しだけのぞかせた。

その時の俺の心情を述べると、
守りたい、この笑顔。

一生懸命パチュリーさんの笑顔を守りますか。

随分とメタい話になってしまいが、ここまで俺が言ってきた東方の二次創作というのは、どこかで見たことのある二次創作だ。題名とかを聞かれても一切、答えることが出来ない。

「煉、何してるのかしら？」

「いえ、何も」

パチュリーさんは自動販売機で買った烏龍茶がいたく気に入ったようなので、キンキンに冷えた烏龍茶をコップに注ぐ。

烏龍茶って美鈴さんが飲んでそうなんだけど、違うらしい。自販機の午前の紅茶は、雑味がある。という理由で却下されましたとき。

パチュリーさんは何でもかんでも、紅魔館のメンバーと比べたがる。

紅茶だって咲夜さんが淹れた方が美味しいって言われたけれど、あの人はプロのメイドだから……。メイド長はやはり偉大であった。

「ねえ、そろそろ苦しいんだけど」

「苦しい……？」

パツと思いついたのは、空気の汚濁による体調の変化かな？とは思った。

しかし、それならそろそろ苦しいとは言わない。つまりは、ハウスダストによる喘息だろう。

「ちよつと待つててください！」

家を飛び出し、そのまま自転車をかつ飛ばして薬局へと向かう。喘息に関する市販薬を買い、そのまま会計に。

そして、また自転車をかつ飛ばして帰宅。

この間僅か30分。いつもなら1時間ぐらいかかる。

「パチユリーさん、これ飲んでください」

「ありがとう。だいぶ楽になったわ」

そう言つて貰えるだけで幸せを感じている俺は手遅れなのだろう。

パチユリーさんはそういつた思考には気付かずに、パチユリーさんは薬の副作用か、コクコクと眠り始めた。

8話 パチユリーさんよりも小悪魔さんの方が苦労人だったそう。

パチユリーさんは30分ほどしたら起きた。どうやらパチユリーさん、薬の副作用にも弱いらしい。本当に身体が弱いのだろう。

ただ、薬の効能はかなりの速さで身体中を巡るようだ。

身体がこちらの世界に馴染んでもいないだろう。1ヶ月ぐらいはゆっくりしてもらおう。

「パチユリーさん、学校って分かりますか？」

「がっ、こう？幻想郷で言う寺子屋みたいなのとかしら？」

幻想郷では確か大図書館からほとんど動かなかっただろうが、なんとかそのぐらいの知識はあるようだった。

今更だが、この思考って完全にパチユリーさんにとっては侮辱しているようにしか聞こえないだろう。

侮辱しているなんてそんなこと、考えることが貴女の前で不敬であります、パチユリー殿。

「大まかに言ったら、そんな感じです。んー、董子さんから何か聞いていれば説明はかなり楽なんですけど……」

董子さんとパチユリーさんは相容れない関係だと勝手に考えている。

なんか、活発に動いて、知識を得ている董子さんと書で知識を得ているパチユリーさんは、知識の得方対極とも言えるだろう。

「董子？ああ、外の世界から来た子なら、何回か大図書館に訪れているわ」

「マジっすか」

まさかの新事実。

そうだとするならば案外仲が良かったりするのだろうか。

そんな考えを見透かしたようにパチユリーさんはため息をついた。

「あの子はなんでもかんでも、科学的にとかなんとか言ってたけれど、幻想郷においては外の世界の常識なんて一切通じないというのに。」

それでフランは董子と大図書館で遊びだすし……」

「図書館が荒れてる……」

「本に傷をつけなかっただけマシね。ほとんど返しに来ない馬鹿もいるし」

魔理沙のことだな。俺はすぐにそう察せた。

東方を知らない人ならば、泥棒か……。つてなるだけだろう。

それにしても、本当にパチュリーさんは苦勞していそうだ。それよりも小悪魔さんの方が苦勞していないか？

「小悪魔さん、いろいろと精神的に大丈夫ですか？」

「胃薬はよく飲んでいたわね」

ストレスの量がハンパではないのだろう。

社畜小悪魔さんに敬礼を。

普段はパチュリーさんにパシられ、魔理沙に世話を焼く。ついに、荒れ果てた図書館を直す作業。

咲夜さんはどこまでの作業をしていたのだろう。

紅魔館に働く者達には寝る時間など一切なさそう。

「で、董子と同じ学校に通っているというわけね」

「董子さんは……」

なんか引つかかる。これまでは一切気にしていなかったことだ。もしかすると、董子さんはこちら側の人間。別に、存在していても大丈夫なはず。

もしかしたら、俺が知らなかっただけで、学校にいるのかもしれない。

「董子さんは、いるかどうかは分かりません」

「何？その不明瞭な答えは」

「董子さんはこちら側の人間なんですよ。いたらいたで、かなりの驚きですけど、いる可能性があるのです。なので……」

「探すってことね。見つけたら持って帰ってきて。少しでも説教したいから」

パチュリーさんの仰せのままに。

つて、董子さんにとっては、知らない男に声をかけられる。家に連

れて行かれる。

つまり、俺の社会的死を賭けたハイリスク・ローリターンの大博打。いや、博打でもないな。一般的に考えれば、ほぼリターンなどないに等しい。

しかし、パチユリーさんが喜んでくれるというのであれば、それは俺にとっての最大のリターンだ。

パチユリーさんのために頑張りますか。

9話 パチユリーさんに対しての不安がありました。

「明日、学校に行つてきますね」

なんとか本題に戻すことが出来た。

董子さんの話を出すんじゃないかという後悔もあるが、ある1つの可能性に気付くことが出来たこともあり、後悔しているか？と聞かれれば、分からないと返答する他ない。

「分かったわ。だいたいどのくらいで帰つて来るのかしら？」

「だいたい8時間前後ですね」

残念ながら俺は部活には入っていない。

入ろうと考えたことも、ついこの1週間前にあつたが、この状態で入りたいと思う人はいないだろう。

好きな人が居候している。そう考えれば、絶対に1分、1秒でも長く一緒にいたいだろう。

「その8時間って何時から……？」

少し伸びをしようと、立ち上がった俺の服の裾を掴みながら聞いてきた。

その顔は寂しそうに主人を見つめる猫のようだった。

言つたら絶対に包丁とか取り出して殺しにかかるだろうから、絶対に言うことが出来ない。

あれ、その風景を側から見ればヤンデレのアレなのでは。

「8時には家を出るので……帰ってくるのは5時過ぎぐらいになります」

高校が家から近いって素晴らしい。

自転車で20分あれば余裕で着くことが出来る。

一応、一人暮らしという形にはなっているが、月1、多い時で週1ぐらいのペースで両親が様子を見に来る。

理由はこの良物件を見つけてくれたうえで、一人暮らしを認めてくれたのは両親だからだ。

そして、現在の俺の心配はその親に対して、パチユリーさんを説明するかだ。

もし、明日の学校に行っている時に親が様子を見にすれば？パチユリーさんはなんと自分を説明するだろうか。

「なにか不安そうな表情ね。どうしたのかしら？」

「あのですね……。親が来る可能性があるのです……。あと、パチユリーさんがちやんとご飯をとってくれるかも心配です」

パチユリーさんは絶食する系女子のような気がするのは俺だけだろうか。

用意されたものしか食べないと思う。

今日はまだ、買い物に行つたからこそ、パチユリーさんの食べたいものを用意出来たが、俺が家にいなかったらどうなるのだろうか。心配である。

「大丈夫よ。両親が来るのだったら、あのクローゼット。押入れというのに入るから」

どこぞの青いたぬきロボットですか？

「それに、いんすたんと麺を食べるわ」「それ、食べて大丈夫じゃなかったやつですよ」

パチユリーさんがボケ属性だとは思わなかった榊原 煉。改行の入らないツツコミを入れてしまう。

「ふふ、冗談よ」

冗談には聞こえなかつたです、パチユリー殿。

とりあえず、作り置きをしておいた方が良いでしょう。

パチユリーさんの体調のことも考えないといけないため、あまり身体に悪いと思うものは入れてはいけません。

塩はかなり少なく、なるべく調味料も使わないようなもの。

ダメだサラダしか思いつかない。

「お米だけあれば充分よ。お茶漬け、この前にレミイが紅白の巫女から教えてもらった簡単な料理を食べてみたいから」

「本当にそれだけでいいんですか？」

お茶漬けならば、身体に悪いものは一切入っていない。

「それが食べたいのよ。聞きたいのだけれど、お茶漬けのお茶って緑茶じゃないといけないのかしら？」

「いや、どんなお茶でもいいですよ」

「紅茶でも?」

「それは僕の思考の範囲外です」

10話 パチユリーさんは多数の属性を持つていそ
うです。

とりあえず、紅茶でのお茶漬けをしようとしていたパチユリーさん
を落ち着けて、俺はノートパソコンを開いた。

「煉がない間にやってみようかしら……」

さつきからパチユリーさんは俺に聞こえるか聞こえないかの境目
の声の大きさをそう、ぶつぶつと言っていた。

米には合いませんってパチユリーさん。無糖ならまだしも。

パチユリーさんは、俺がノートパソコンを開いた時には既に横にい
た。瞬間移動のように速かった。

パチユリーさんは現代の技術に興味があるそうです。

「のーとはそこんよね？今から何をしようというのかしら？」

その時のパチユリーさんの顔は少し怒り気味だった。

もう少し相手してよ。とでも言いたげだ。

「晩ご飯をどうしようかと考えていたのですよ。パチユリーさんは何
か食べたいものはありますか？」

「紅茶漬けご飯」

「却下で」

なぜそこまで推すんですか……。

むー、と頬を膨らませて、俺の背後へと消えて行った。

「いや、本当に何するか……」

そう呟いた時、左肩に何かが乗る感覚があった。

見ると、黒光りするような昆虫、通称・Gなどではなく、パチユリー
さんだった。はい、失礼なことを考えてましたすみません。

顔が近い。パチユリーさんの顔が文字通り、目と鼻の先にあった。

童貞にはかなり辛い状況です。

「どうしても、ダメ？」

パチユリーさんは少しだけ目を潤ませて、俺の肩の上で顔を傾け
た。

駄目、と言いたいのだが、こんなことをされては断りにくい。

あと、断ったら自分の中でのパチユリーさん好きの精神が死んでしまうような気がする。

「……分かりました。けど、俺も食べるのは今日だけですよ?」

「良いわよ。煉と一緒に食べるのは、私にはあまり関係ないことだし」
手の平の返すスピードが速い。

そういうところもひっくるめて、パチユリーさんのことは好きだ。
パチユリーさんの魅力は今後も全力で伝えていく予定だ。

「どうしてこんなにパチユリーさんは可愛いんだ……」

「な、何言ってるの?!」

その反応を楽しみにしてました。

パチユリーさんは可愛いと言われることに慣れていないらしい。
それは俺にとつては喜ばしいことだ。

このように、顔を紅く染めて、俯いて照れている顔を隠そうと必死なパチユリーさんを見ることが出来ているのだから。

「大丈夫ですか?」

「だ、大丈夫なわけないわよ!」

ツンデレ頂きました。

「だいたい! 私のことをか、可愛いって言うって相当頭やられてるわよ?!」

パチユリーさんのキャラは崩壊真っ只中でございます。

ツンデレ系のパチユリーさんもこれまた良い。

時間を見てみると、そろそろ午後6時を短針が示そうとしていた。

11話 パチユリーさんはラフな服装が似合うと思います。

「なぜこちらの人たちは学校に行くのかしら？」

夕食を食べている時に話された言葉だった。

ちなみに夕食の内容はパチユリーさんのリクエストである紅茶漬けご飯だ。意外と合う。

「勉強なんかしなくても自分で知識を身につければいいだけの話だと思ふのよ」

確かにそれはそうと言える。

実際に、自分の興味のないものの知識を身につける必要はないと感じる。

俺自身の考えであれば、義務教育を修了した時点でそこから個々の道へと進む。それならば、その道に進むために必要な知識のみを蓄えればいいのではないのか。

ただ、勉強はしないとイケないという思考が頭の中で形成されている。

「なんででしょうかね……。自分の中では勉強しないとイケない気がするんですけどよね」

「必要でないことを学ぶのは学習するのは学ぶとは言えない。必要であるものを学ぶことを学ぶと呼ぶのよ」

パチユリーさんはサラッと名言を言ったのけた。

確かにその通りなのだろう。その通りのだが、仮にも高校に通わせてもらっている身。

簡単に学校をやめることはできないのだ。

「パチユリーさんが教えてくれるならばまた違うのでしょうか」

「私に教えることが出来るのは少ないわよ」

「多くの知識を持っているのですか？」

「知識を理解するのと教えるのは似て非なるものよ」

理解するのと教えるのでは勝手が違うことはよく分かる。

よく昔にこの部分教えろだの古典文法を教えてだのと言われた記憶がある。

その度にどう説明すると理解しやすいかとかを考えていた。

「ねえ、魔導書とかないの?」

「ありません」

「ばそこんの説明書とかは?」

「ありますよ?」

「寝る前に読ませて」

「承りました」

ここまででやっと気付いた。

パチュリーさん、いつの間に説明書を知ったのだ?

買い物から帰ってきてから何も触っていないはず。触ることが出来る時間は……。

まあ、一つだけあるが、差し支えない問題のため、その思考を停止し、頭の奥の方へと追いやった。

意識をパチュリーさんへも向けると、パチュリーさんは目を輝かせながら、ウキウキとしていた。

新しい知識がタダで手に入るのだ。

とても喜ばしいことだろう。

「あ、聞くのを忘れてたのだけれど、シャワーとかあるかしら?」

「勿論です。廊下を歩いて右にあります」

「入るわね」

「了解です」

そう言つてパチュリーさんは案内した通りに、風呂場へと入つていった。

……………ん?

そういえばパチュリーさんつて着替えの服を持ってなかったよな?

当然のことだが、服は洗わないといけない。

ならば、パチュリーさんは何を着るべきなのだ?

そして、もう一つ当然のことであるのだが、俺の家には俺の分の服、

男性物しかない。

その中でパチュリーさんが着られるようなものを見繕うべきか？

頭がショート寸前になりながらも、必死にタンスを漁った。

「用意されているものを着ただけけれど……。これでいいのかしら？」

脱衣所から出てきたパチュリーさんは、白の無地のシャツと少しダボツとした灰色のズボンを身につけていた。

俺が頭をフル回転させて、見繕った服だ。

見て分かる通り、なんの特徴もない服だ。

ただ一つだけ言えるのは、そんななんの特徴もないからこそ、身体
のラインがくつきりが出る。

他の人よりも少し大きめの胸に視線が行くのは、男性であるならば
仕方ないことだと言えよう。

「少し大きいわね」

そして、萌え袖。

最高ですね。

「何か変なことでも考えているでしょう」

「いえ全く」

変なことは考えていません。

12話 パチユリーさんの生活が2日目に入りました。

ジリリリリリ……と、けたたましい目覚まし時計の音が繰り返し、耳に届いた。

「うるせえ……」

頭の中では起きないといけないことは分かっている。しかし、身体がそれに対しての拒否反応を起こしているのは、学校に通う者には日常のようなものだろう。

目覚まし時計の音を止めようと、そこかしこに手を伸ばしてみるも、目覚まし時計のようなものはない。

俺自身が止めたわけではないのだが、唐突に音は止んだ。

「ん……？」

「朝からうるさいわね……」

俺は寝ていたソファから身を起こし、声のする方へと目をやった。

そこには、一昨日の夜に突如として我が家に舞い降りた女神こと、パチユリー・ノーレッジが不機嫌そうな顔で俺の方を見ていた。

左手には目覚まし時計を持っている。

どうやら、パチユリー神が止めてくれていたようだ。

「なにその解説」

「おっと失礼、心の声が漏れてしまいましたか」

昨日はまあ……、パチユリーさんと一緒にスーパーに行つて嫉妬の視線を向けられたり、パチユリーさんが食べてみたそうだったインスタント麺にパチユリーさんが打ちのめされたり、パチユリーさんの要望による夕食の紅茶漬けご飯が意外と美味しかったり、いろんなことがあった。

一部省略しているのは見逃す。

そんなこんなで、パチユリーさんとの共同生活は2日目を迎えることとなった。

「とりあえず、冷蔵庫の中にあつたもので簡単に作ったのだけれど」

朝食はパチユリーさん手作りのサンドウィッチ。

朝から幸せなことがありました。

幻想郷以外のこの世にパチユリーさんの手料理を食べることが出来る人間はいるのだろうか。

パチユリーさんが魔理沙に食べさせているシーンとか見たいな。ちなみに、俺はマリパチエ推しだ。

「味はどうかしら。初めて作るものだからよく分からなくて」

不安そうな表情を浮かべるパチユリーさんは新鮮で、可愛かった。

「美味しいですよ。言うとすれば、サンドウィッチに塩は必要ないです」

中の具材はレタスとハム。

それを食パン二枚で挟んだ至って普通のサンドウィッチだ。ただ、どことなく塩気がするだけで。

「あれ、料理に塩胡椒は必須じゃ……」

色々な魔法の知識を蓄えていても、料理に関してはまだまだ知識が足りていないようだ。

後でク○クパッドへのアクセス方法を教えておこう。

「煉、今日から5日間……よね?」

「ええ。そうです」

パチユリーさんは哀しそうな表情を見せた。

この表情を一刻も早く消すために、全速力で帰ってこよう。

「そろそろ時間じゃないの?」

「いや、あと10分ぐらいは家にいれます」

……。

何故だろう。

この時間、普段ならば何も感じないはずなのに、パチユリーさんと一緒にいるせいか、かなり気まずい空気になっている。

いや、パチユリーさんと一緒にいるからではない。

俺の方から話すことの出来る話題が特にないのだ。

そのまま、何も話せないまま5分ほど経った。

「そろそろ行きますね」

「あ、うん。行ってらっしゃい」

俺は気まずい空気に耐えきれず、逃げ出してしまった。

このような者を意気地なしと言うのだろう。

その言葉は今の俺に当てはまる。

結果、予定より5分早く出ることになった。

その時の俺は、パチユリーさんの寂しそうな目を見ることは出来なかった。

13話 パチユリーさんを家に置いてきて良かったのか不安です。

学校に着いた俺は足早に教室へと歩を進めた。

席に座り、頭を抱えた。

すると、すぐに教室の扉は開いた。

「おはよっすって、お前か。ん…？」

「お前いつになく早いな……」

いつもであれば、遅えよ。と罵ってくるクラスメイトが驚きの声をあげていた。

「うっせえ黙ってろ」

「おいおいかなり落ち込んでんな、女にでも振られたか？」

こいつの言っていることは、見当違いの方向へと投げ込まれた。

現在俺が悩んでいるのは、パチユリーさんを家に置いてきて本当に良かったのだろうか。

もちろん、学校に連れてくるということとは出来ない。

とりあえず、休み時間になれば一度電話をかけてみるか。

「咲夜、かなり大変なことをしていたのね……」

今日の朝食なのだが、まるで簡単に作ったかのように見えたが、かなり時間がかかっていたりしていた。

本来であれば、パチユリーは何も食べることなく、研究に没頭することが出来る。

しかし、今は捨虫の術が機能していないため、何も食べないという

わけにはいかないのだ。

ただ、パチユリーは一切料理を作ったことが無かった。

「私が料理をするなんて考えたこともなかったわね」

あくまでも居候させてもらっている身。

「煉はしなくてもいいと言うのだろうけれど、やらないと私が落ち着かないのよね」

そう思い、私は私にとっては少し高めの椅子から下りてキッチンへと向かった。

そういえば、董子さんも探さないといけないのだった。

どれだけ自分のことを忘れても、パチユリーさんの願いは叶えなければならぬ。

俺はノートの片隅に、董子さん搜索。

と書き、丸で困った。

その時、何か嫌な予感がした。

「パチユリーさん大丈夫か？」

その煉の予感は的中していた。

パチユリーさんは洗い物をしていた。

洗い物といえば、片付けに近いものだろう。パチキュリーがいる台所では、皿やコップが片付くどころか、散乱していた。

「ここまで家事が下手だとは……」

パチキュリーは台所で落ち込んでいた。

家事が下手だとは思わなかったのだろう。

しかし、パチキュリーは諦めなかった。

洗い物を諦めて、他のところを掃除しようと、リビングへと向かった時だった。

固定電話というものが鳴った。

そこから流れてくる声はとても無機質であり、幻想郷では聴いたことのないような声だった。

固定電話の出方というのは昨日の夜に、煉から聞いている。

「もしもし?」

『あ、パチキュリーさん、出れた?』

その私を未開人のように扱う喋り方に少しだけ、イラつとしたが、外の世界にとってはそれが当たり前なのだ。

だから、我慢した。

「ええ、特になんの問題もないわよ」

『本当にそうですか? 片付けようと思って逆に散らかしたりしてないですか?』

「うっ」

なぜ、煉はそのことを知っているのだろうか。

ここにカメラなるものは一切置かれていない。

ということは、煉はエスパーなのでは?

「……洗い物しようと思って、逆に散らかしたわ」

『皿とか割れてケガしてないですか? ケガしたら、救急箱とかの場所教えるんで』

「大丈夫。心配しないで」

かなりの心配性なのだろう。

外の世界の人々は皆、このような者ばかりなのだろうか。

ただ、煉には心を許したが、他の者には心配させないように振る舞うつもりだ。

『あ、お昼ご飯は冷蔵庫の中にある丼に肉じゃがを作っているんで、それをおかずに食べておいてください』

私はそこまでやっている煉に対して、クスツと笑った。

別に、そこまでやってもらわなくても大丈夫なのに。

「分かったわ。なるべく早く帰ってきてね」

『……はい』

受話器の向こうから聞こえた声は、とても嬉しそうな返事だった。そろそろ、切ろうとする向こうから切ってきた。

時間を見ると、授業とやらが始まるのだろう。

「私が好意を持てると思えるのは、煉のような人な気がするわね」

私はそつと受話器を元に戻し、洗い物の残骸を少しだけでも直そうと、キッチンへと向かった。

14話 パチユリーさんの命令の遂行は明日ということだ。

授業が終わり、ホームルーム。

その時の俺の足の指の方向は、教室の扉の方向を向いていた。

担任の教師の恒例とも言える少々長い小言が終わり、帰りの挨拶が済んだ。

「よし、董子さん搜索」

早く帰りたいのは山々である。

ただ、パチユリーさんのお願いであり命令は、俺の欲求よりもずっと大きい、最優先事項なのだ。

董子さんの高校、東深見高校というのはこの辺りで聞いたことがない高校である。

「とりあえず東深見高校のことを聞いていった方がいいか」

東方の設定であれば、董子さんは自分から他人が近づけないようにしている。

それであれば、何も知らない生徒に聞いても絶対に分からないだろう。

まず、今日の朝にちよつかいをかけてきた友達に聞くとするか。

「なあ、お前って東深見高校って知ってるか？」

「ん？ 東深見だったら知ってるぞ。確か隣の市の更に隣の市だったはず」

まさかの知っていた。

隣の隣の市。今から行ったとしても、帰れるのは日が暮れてからだろう。

そうなつては、パチユリーさんの可愛いところを見る時間が減るもといパチユリーさんを不安にさせてしまう。

仕方ない。今日はその情報だけで満足するか。

「なんで、そんなこと聞くんだ？」

俺がそのことをわざわざ聞くことに、疑問を抱いたらしい。

こうなった時のこいつの絡みは面倒だ。

「もしかして、朝に落ち込んでいた理由か？ 振られた女のいる場所か？」

「違えよ。何考えてんだ」

このような絡みがあるから、こいつにはあまり聞きたくなかった。

ただ、俺の交友関係がかなり狭いことも事実。

早く別の友人も作らないといけないと思う瞬間だった。

「なあ〜教えろよ〜」

「うるせえ黙れ、もうお前は用済みだ」

「ひっど!? お前、俺のことどう思ってたの?!」

「絡みのウザいクラスメイトA」

「見事に言い得てやがる……」

「パチュリーさん、ただいま帰りましたー」

「あら、少し遅かったわね」

時間を見ると、5時30分を過ぎたところだった。

夕飯の支度をするため、買い物もしていたのだ。

ふと見ると、パチュリーさんの表情はどこか満足げだ。

何かあったのだろうか。

そう思いながら、台所を覗くと、かなり綺麗になっていた。

洗い物に失敗したとは思えない。

「頑張ったでしょ」

ドヤ顔のようにも見えるその表情はとても撫でたくなるようなものだった。

褒めて、と言っているのだろうか？

「すごいですね。本当に失敗したのですか？」

「ええ、なんとかあったわ」

パチュリーさんは2回目で慣れることが多いのだろうか。

今度、料理を教えることにしよう。

多分、吸収と理解は早いだろう。あと今のうちに、パソコンの扱い方も。

「パチュリーさん、パソコンの使い方を教えますね」

「!!」

パチュリーさんは目を輝かせた。

未知のものに対する興味はあるようだ。

壊されないようにするか。

15話 パチユリーさんはパソコンの扱い方を覚え
えました。

「まずですね……」

俺はパチユリーさんにパソコンの使い方を教えようと考え、ノートパソコンを開いたのだが。

パチユリーさんは息が聞こえるほどの近さにいる。

正直なところ、心臓がバクバクと鳴って落ち着こうにも落ち着けない。

「電源の入れ方分かります?」

「それぐらい判るわよ」

少し頬を膨らませながら、不機嫌に答えるパチユリーさん。ただただ可愛いの一言に尽きる。鼻目無しに見ても、今、この状態のパチユリーさんを可愛いと思わない男はいないだろう。出来ることならば今すぐ写真を撮って永久保存にしておきたい。

「早く」

未知の物と俺とでは、ランクとしては未知の方が上のようで。哀しい。

役に立たねば。

「パスワードを入力します」

「今日、ここまで行ったのだけれどもパスワードが分からなかったのよね。何処かに書いてある紙とかあると思って探したのだけれど無くて」

どうやら、予想どおり俺が学校に行っている間に触ろうとしていたらしい。

パスワードの紙を鞆に忍ばせておいて正解だった。

と思いつつも、俺自身が学校にその紙を忘れていたという事実はある。絡みのウザい友人に見つからないことを願うばかりである。

「パスワードは……」

maripachesisikouと打ち込み、パスワードを解除す

る。

「パスワードはmaripachesisikou……と」

「どうやら一回見ただけで覚えたらしい。

さすがの記憶力です、パチュリーさん。

勘がいい方はお気づきになられただろう。このパスワードは日本語に戻すと『まりぱちえしこう』。つまりは魔理パチエ至高という意味だ。

特段、深い意味はない。

魔理パチエのカップリングは最高だ。ただそれだけのこと。

「そしてデスクトップという画面になると、ここから自由にネットを使ったり、文字を打ち込んだりできます」

「成る程……。煉、何か私に見せて」

「仰せのままに」

パチュリーさんから冷ややかな視線を感じるが気にしない。

我々の業界、少なくとも私にとってはご褒美です。

「マゾなのかしら？」

「そんなことはないです」

とりあえずインターネットブラウザを起動し、Google大先生を開く。

Yahoo先輩でもいいのだが、何故だろう。

信頼感が違うのだ。

「検索……。クックパッドでも教えようかな」

クックパッドを検索。

ウールスバスターがちゃんと作動していることを確認しながら、パチュリーさんに手渡す。

クックパッドはすでに入っている。

「ここから……。どうするの？」

「このカーソルをこの空白に入れて、形が変わりますから、左のボタンを押します。それから……」

パソコンの使い方をパチュリーさんに教えたら、すぐに覚えた。ウイルスが入ってしまったわかないか。いや、入るだけなら問題ない。入ってしまった上で、パチュリーさんが混乱しないか。混乱して、パソコンを壊さないか。

それだけが1番の不安要素だ。

そして現在、朝のリベンジとしてクック○ツドから取ったレシピを見ながら、パチュリーさんは夕飯を作っている。

献立としてはハンバーグだそうだ。

とりあえずパチュリーさんが見えていない今がチャンスだ。拝んでおこう。

「ありがたや、ありがたや……」

「煉、サラダ油ってどこ……何をやってるのかしら」

「後ろめたいことなど一切しておりませぬ。ただただパチュリーさんのことを拝んでいただけでございます。あ、サラダ油は冷蔵庫の隣にある棚の1番下に入ってます」

「そういうのがなければ、良い人だとは思うのだけれど……」

こういう風に呆れられることも、俺がパチュリーさんのことが大好きであるからこそ、気持ちの良いものとして受け止められる。

「出来たわよ」

「それでは、食べましょうか」

パチュリーさんが来てから、何かが劇的に変わるわけではない。

俺の中の優先順位が入れ替わるだけだ。

だから、この平凡な日常を。

「パチュリーさん、サラダには塩は必要ないですよ」

「え？振った記憶はないのだけれど……。あ…、あの時に塩の入って

いる容器を倒してしまった時に……」

「塩分の摂り過ぎには注意してくださいねー」
ひっそりと囁み締めおこそう。

閑話 パチユリーさんはチョコを作ることにしたそうです。

多分、語られることのない、パチユリーさんが現代入りしてから数ヶ月後のお話。

「煉、そこどいて」

今日のパチユリーさんはその一言から始まった。

台所だ。俺としては、おはようの一つぐらい貰えるとは思ったが。それはそれとして、別に大丈夫なことだ。

「朝食を作ってるんで、それが終わった後でもいいですか？」
「ええ」

パチユリーさんに家を追い出されましたとき。パチユリーさん曰く、18時までには帰ってきてほしくないそうです。

何か隠したいことでもあるみたいだが、その候補は皆目見当もつかない。ま、詮索するような野暮なことはしません。

さて、どうしたものか。

困ったときのクラスメイトAの家にでも遊びに行くことにするか。家を追い出された時点で、その事項は確定していたため、今すでに、Aの家の前に着いている。

ちやんと事前に連絡はしている。

「おーい、来たぞー」

「お、煉来たか。テスト前に何時まで居座るつもりだ？」

「18時まで。数学教えてくれ」

「ま、古典とか教えてもらってる身だしよ。OK。どこからだ？」

さて、煉を追い出したことだし、早く調理を始めよう。

事前にクックパッドでどのようなものを作るのか決めていたのだが、どうしても悩むものがあつた。

ケーキにするか、クッキーにするか、はたまたトリュフと呼ばれるようなものにするか。というか、あれはトリュフではないだろう。何故そう呼ばれるようになったのか気になるのではあるが、それはまた後日にしよう。

レシピに関しては既に印刷済みである。

コンビニはやはり便利だ。

タイムリミットは8時間。

失敗することも考えても充分すぎる時間量だ。

材料はなんとか全部揃えた。

煉から隠れてこそこそと揃えるのは何かと苦労した。

まずはボウルにマーガリンを入れて、レンジ200Wで1分。

「そういうえば、どんな味のチョコレートなのか食べてなかったわね。

どんな感じ……、苦い」

けれど、煉は甘いものは苦手だと言っていた。それならば、苦いぐらいが丁度良いだろう。

それにしても1分が長く感じる。いつもであればあつという間にすぎるといふのに。

1分経つと、ボウルを取り出し、砂糖を加え、捏ねずに切るようにさつくりと混ぜる。

そこに卵を入れ、更に混ぜる。更にホットケーキミックスとココアパウダー、牛乳を少しずつ入れて混ぜる。

少し粉が舞うため苦しいが、そこはすぐにマスクを着用。これで粉塵系の作業も楽になる。牛乳を入れるため、すぐに固まるが。

「そして、板チョコを刻む……。あ、その前にオーブンを温めない」と予熱を170℃にセット。

これで多分大丈夫なはず。

板チョコを4×6mmに刻み、ボウルの中で混ぜてあるものに混ぜ込む。

そして、それをカップに入れる。この量だと6×7個ぐらいは作れそうか。

オーブンは……まだ温まりきっていない。もう少し待たねば。

「大体理解出来た。あんがと」

「おう、それじゃあ漢文教えてくれ」

「どこがわからない？」

「全部」

「は？ 返り点はパズルだろ?!それも分かんねえのか?!」

「あんな難解な暗号だろうが!」

「ふう……」

完成した。

簡単なカップケーキではあるが、菓子作り初めてにしては良い方だろう。煉は喜ぶだろうか。

全部で6つ作れたため、1つは味見ということだ。

それではいただきます。

「はむ……。ん……。想像よりちよつと甘い……」

美味しいのだが。

味がまだ立っている。1時間ほど置いたらいい感じに落ち着くだろうか。

とりあえず、残りの5個は置いておこう。

完成にかかった時間は1時間30分ほど。そこから置いておいたら流石に味も馴染むだろう。

手作りのものを煉にあげるということを考えると、とても嬉しく、思わず笑みが溢れそうになるが、至ってクールに。いつも通り、冷静に煉と接しよう。

それにしても暇である。

晩ご飯の献立でも考えようか。

「パチュリーさん、ただいま帰りましたー」

「お帰り、煉」

パチュリーさんはなぜかそわそわしていた。あと、どことなく嬉しそう。

テーブルの上にはチョコと思われるカップケーキが5個ほど並んでいた。

「余ったからあげるわよ」

「作って……くれたのですか……?」

「煉のためじゃなくて!」

可愛いよパチュリーさん、ああ可愛いよパチュリーさん。

わなわなと手は震え始める。仕方ない。

あのパチュリーさんからチョコをもらえるのだ。

自分の大好きなパチュリーさんからチョコをもらえるのだ。嬉しくないわけではないだろう。

「ありがとうございますー!」

額を地面に打ち付けるほどの勢いで土下座した。

「私のような下賤な民に」

「下賤?!」

「なんともつたいたい…。家宝とさせていただきます」

「食べなさい」

「はい」

一口含むと、程よい甘みが口の中へと広がった。

しっかりと味が生地にも馴染んでいて、あまり甘くもない。なんとうか、凄く俺好みの味だった。

「超がつくほど美味しいです」

「そう、良かった」

素っ気ない返事の中になんとなく、笑みが含まれていたような気がするが、俺はそのことを気にしていなかった。

さて、このお返しはどうしたものか。

閑話 パチユリーさんはホワイトデーのことを知っていたのでしようか。

これもまた、語られることのないであろうパチユリーさんと煉の日常的一幕である。

春分の日を過ぎたというのに、まだ冬の寒さの残る3月中旬。雪溶けはまだ先となりそうだ。

三寒四温を繰り返しながら、春へと向かうというが、実際にはそうはいかない。というか春の陽気はまだまだだろう。

そんなことはどうでもいいんだよ。

現在、俺は2、3駅離れた場所にあるデパートへと足を伸ばしていた。

来た内容はシンプルで簡単。パチユリーさんへのバレンタインのお返しというわけだ。

本来であれば、準備はかなり前からやっておくべきなのだろうが、勘が鋭いパチユリーさんのことだ。

すぐにお返しすることに気がつくだろう。なるべく、パチユリーさんにはサプライズ的な感じで渡したい。

なので3月14日の当日に買うしかないのだ。

「喜んでもらえたら一番いいんだが……」

そうは言いつつも、何を贈れば、パチユリーさんは喜ぶのかが分からない。

パソコン。確かに喜ぶだろう。だが、そのような高価なもの、俺の現在の資金では足りない。

クッキーのような菓子類。それであれば資金的にも大丈夫だし、ちよつと高めの物でも持つていけば普通の人なら喜んでくれるだろう。しかし、パチュリーさんにとつてお茶会で飲むようなものを想定する人は咲夜さんのものが舌に馴染んでいる。

デパートのクッキーでは満足しないだろう……。

「難易度高すぎんだろ、これ」

菓子類と考えると、1個だけ閃いた。

菓子類で考えていると、どうしても洋菓子で考えていた。洋菓子で考えると、咲夜さんや紅魔館で働いているメイドの人たちが作った方が確実に美味しい。

ならば、和菓子ならどうだろうか。彼女が比較的慣れていないもの。資金で買える範囲内で割高なもので考えれば、パチュリーさんも喜んでもらえるのではないだろうか？

「よし、これなら大丈夫だな」

多分という言葉は付きまってしまうが。

「パチュリーさん、ただいま帰りました」

「おかえり、どうしたの？ いつもよりかなり遅かったけれども」

「いやまあ、ちよつと二駅ほど離れたところに用事が」

嘘はついていない。

俺の勝手な誓いなのだが、パチュリーさんの前では絶対に嘘をつかない。嘘をついてしまえば俺は罪悪感に悶え苦しむだろう。

それにしても、パチュリーさんはお昼ご飯を作って下さっていたよ

うだ。匂いで感じるならばカレーといったところか。

「パチユリーさん、これ。バレンタインデーのお返しです」

「あ、ありがとう」

パチユリーさんの手に、小さめの紙袋が渡る。

パチユリーさんは中身を見ると、何処と無く微笑んだような気がした。

「バウムクーヘンなのね」

そう。

俺がパチユリーさんにお返しとして渡したのは洋菓子である、バウムクーヘンだった。

その後、色々なことを考えた。

和菓子であれば、パチユリーさんはきつと喜んでくれるだろうと考えていたが、和菓子は好き嫌いがはっきり別れることが多い。

それでもし、パチユリーさんの苦手な部類に入るようなものを選んでしまっただけじゃない。

そこで、ホワイトデーにおいて意味のある洋菓子にした。

意味のあるというのは、例えばマシユマロは「嫌い」の意味が含まれ、飴であれば恋愛の「好き」という意味が含まれる。飴の場合、味によって意味が大きく異なってくるが、そこは割愛する。

そして、俺が選んだバウムクーヘンの意味は。

「このまま変わらない関係を煉は望むのね」

「はい、俺にとって今が一番ですから」

パチユリーさんは煉らしい、と呟いて、台所へと向かった。

「ランチが終わったらティータイムにしましょう」

「了解しました」

「お茶請けはそのバウムクーヘンにしましょう」

「了解しました。冷やしておきますね」

偶にパチユリーさんは俺に何か欲しいものはないの？と聞いてくることがある。もちろん、俺にとってはパチユリーさんがそこにいてくれているという現状に満足している。

ただ、1つだけ欲しいものがあるとするならば、それは、

どれだけ経とうが変わらないこの関係を。

16話 パチユリーさんには嘘はつけない体質の主人公です。

「え、来週から体育祭のダンス練習？」

「おう、お前もしかして話聞いてなかったのか？」

「勿論」

今現在、俺が考えていることはパチユリーさんと何をするかや、どうやって董子さんに会うか。忘れられているかもしれないが、現在のパチユリーさんから仰せつかっている最大のミッションは董子さんとパチユリーさんを会わせること。

ならば、このダンス練習とやらは休むしかない。うんシカタナイネ。

「すまん。来週は用事があるからまた別日に練習するわ」

「お願いだから残ってくれ。友人Aの願いだぞ？」

「誰がお前の願いなんか聞くんだ」

そう言つて、俺は教室を後にした。

放課後に残つてダンス練習だ？ なんのために俺は帰宅部なんだ。

無事に生還してこそだ。

泣き継られても絶対に帰つてやる。

「なんてことがありまして……、納得して頂けたでしょうか？」

「ふーん、それで今週から帰るのが遅くなるってことね。どうしても一つ気になる点があるのだけれど」

「なんのことでしょう？」

「帰ることを優先してるのに、何故練習するのかしら？」

まさにおつしやる通りでございます。

簡単な経緯を説明すると、先ほどの翌日に行くと、見知らぬ女子から泣き縫られました。そして、多くの人に見られているわけです。そして、口だけの約束をしようとしたら、Aに録音されました。つまり、言質を取られたということ。どうやらそれはAの作戦だったそうです。Aの野郎マジで許さねえ。

「そういうこと」

納得してくださいったパチユリーさん。

少々落ち込んでいるというのはどうしてなのか、皆目見当もつかない。目の錯覚であろう。きっとそうだ。

「パチユリーさん、すみません」

「いいのよ。普通の人なら、こういう時には黙って嘘を吐いて逃げるのに、煉は全て洗いざらい答えてくれた。責める要素はどこにあった？」

「いやそんな滅相もない」

私はただただパチユリーさんの目の前で嘘をつくど発狂して死ぬという体質の持ち主だけです。

いや結構、パチユリーさんに褒められるのは照れる。

贅沢を言うのであれば、その後に罵詈雑言を並べて欲しかった。我々の業界ではご褒美です。

「まあいいわ。明日は土日なのだけれど、予定はどうなの？」

「特にないのですが、パチユリー様もずっと男物の服を着るのも嫌でしょうし、人混みに慣れるのも兼ねて一緒にショツピングと行きましょう」

なるべく無難なものを選んで、パチユリーさんに着せているのだが、パチユリーさんも流石に嫌だろう。

それに、パチユリーさんが現代の服でどんなものを選ぶのかも気になる。それはそれは素晴らしいセンスなのだろう。

いや、パチユリーさんのセンスは全て正しいのだ。つまり、パチユリーさんが白と言えば黒も白となり、黒と言えば白も黒となる。

パチユリーさんは正義である。

「煉、声に出てるわよ」
「あ、すいません」

17話 パチユリーさんと主人公の間に本日限りの主従関係が成立しました。

「パチユリーさん、ここまでおんぶで来ましたけど、そろそろ恥ずかしい頃合いです」

今現在、最寄り駅へと向かう道の途中。パチユリーさんを家からずっとおんぶしながら、ここまで来た。かれこれ15分ほどだろう。通り過ぎるオバサマ方の目が異様に温かいのです。根幹はしっかりしている俺のメンタルでもさすがに恥ずかしい。

「駅はもう見えているわ。そこまでちゃんと連れて行きなさい」
「サーイエッサー」

酷い棒読みである。

そこで井戸端会議をされている奥様方、やめて、そんな生温かい目でこちらを見ないでください。

一番の救いは、高校の同級生に一切会わなかったことだろう。もし、会ったらどう説明すればいいのやら。手っ取り早く説明するならば、彼女って言えばいいんだらうけども……。

そんなこんなで、ギリギリで駅に辿り着くことが出来た。

なぜだろうか、今日の天気予報ではそこまで暑くならないはず。汗が、冷たい。

「お疲れ様、煉。助かったわ」

「そう言っただけで頂けると、苦労も報われます」
割と本気で。

「電車、と呼ばれるものなのね？」

「はい。まずチケット買しましょう。話はそこからになるんで」
「分かったわ。あそこの券売機に行けばいいのね」

流石パチユリーさん。飲み込みが早い。

あとは体力をつければ、すぐに日常生活では何も不自由はなくなりそう。

「れーんー、お金ちょうだい」

「はい、あと券売機の使い方も教えますね」

「幻想郷にはない文明って素晴らしいほどに発展してるわね」

「幻想郷の方にはこんな冷房とかなさそうですね」

電車の中で揺られながら、目的の駅へと向かう。

今回は特にその駅の近くにあるデパートが目的だ。その女性物のところはうちの高校からも近いということで、女子高生が多くいることもある。その中でも同級生と会えば割とキツいかもしれない。

「そろそろ、足が疲れてきたわ」

「あと一駅なんで、我慢してください。今おんぶしたら私のメンタルが崩壊しますし、座席も空いてなかったんですから」

「むう、仕方ないか」

慣性によつてパチュリーさんが倒れないよう支えるため、軽く手を繋いでいるのだが、パチュリーさんは揺れる度、強く強く両の手で、俺の腕を掴む。

それがなんと幸せなことだろうか。幸せに感じない人間がこの世にいるのだろうか。

「早く着きなさいよ、こんな姿、煉に見られなくなかったんだし」

「ツンデレですか？」

「違う」

即答されてしまった。

いやまあ、その見せなくなかったという姿を見せて頂いた時点で私の勝利でございますパチュリー様。誠にありがとうございます。

『○○○○ー、○○○○ー、お出口はー、右側ー』

「そろそろ着きますよ。駅の外に出たらまたおんぶします?」

「調子に乗るんじゃないわよ」

「了解しました」

駅を出ると、都会特有の熱気に襲われる。なんとも言えない不快感。自宅から出て暫く感じていた自然の熱ではない人の熱。パチユリーさんは大丈夫だろうか。

「早く、行きましょ。そうじゃないと私がこの暑さで倒れてしまいそうだわ」

その時にようやく気付いた。

電車を降りてからもずっと繋がれている俺の左手とパチユリーさんの右手を。

「手、繋いだままでいいんですか?」

「放してほしいの? それだと私、迷う自信しかないのだけれど」

「いえそんなことは全く微塵も思っておりません」

「そう、なら私を上手くエスコートしてね? 煉」

「仰せのままに、お嬢様」

何故だろう。このセリフがすんなりと頭に出てきたし、パチユリーさんも満足げな表情を浮かべている。

まあいいや。

今ここに、普段着の男性と紫の服を着た細身の少女の今日だけの主従関係が成立したように思える。

18話 主人公はパチユリーさんへの気持ちを考えてみました。

「上の階へ上がるために階段を登るのではなく、階段を上へと動かせばいい、ね。楽をするためによく考えられてるわね」

そんなことを呟きながら、エスカレーターに乗るパチユリーさん。駅のエレベーターでも驚きはほとんどなかったため、エスカレーターもそこまで驚かないだろうと思っていたら、なにやら先人たちに感心しておられるご様子。

今回、パチユリーさんに文明の発達を見せにきたのではなく、パチユリーさんの普段服を買いにきたのだ。エスカレーターだと、俺の通う高校の同級生に見つかる危険性というものは格段に上がる。

「パチユリーさん、エレベーターで上がりませんか？」

「目的階は何階なのかしら？」

「5階ですね」

「今現在、私たち3階にいるのよ。わざわざエスカレーターから変える必要はないように思えるのだけれど」

「ごもっともな意見でございます。」

「それに、変な人間が私に近づこうとしたら煉が止めるのでしよう？」

「それは勿論。大好きなパチユリーさんに近づく不屈き者には指一本、パチユリーさんに触れさせませんから」

ボディーガードは頼もしいわね、と軽く笑いながら、パチユリーさんは4階へと昇るエスカレーターに乗る。置いていかれてはいけない。そう思い、小走り気味にパチユリーさんを追いかけた。

何故だろう。今日はパチユリーさんにかかわれている気がする。まあそれはそれで、俺にとっては嬉しいことでもあるのだが。

あ、決してドMというわけではない。いいね？

いつだったか、姉の影響で、ある少女漫画を読んだことがある。その中に出てきた言葉が脳裏に焼き付いている。

曰く、「恋は邪であり、愛は純情」。

ならば、それが同居する恋愛は矛盾を含んだものなのだろう。

しかし、今俺がパチュリーさんに抱いているこの感情は恋なのだろうか。それとも、愛なのだろうか。

未熟な俺の感情ではそれが見当もつかない。

もし、恋であるというのなら俺は、どうすべきなのだろうか。

「煉、そこにいたら他の人の邪魔になるわよ」

「あ、すみません」

どうやら、パチュリーさんが来る前によくあった、独りで考え出すという癖が出てしまったようだ。

今日の前にはパチュリーさんがいる。その幸せだけを今は噛み締めたいればそれで正解なのだ。

ただ、そこに邪な感情が生まれてしまえば？ 俺はどうなる？

そんなことを考え始めると、止まることが出来なくなる。

その考えを振り払うために一度、頭を大きく横へと振った。

「あ、パチュリーさん、待ってくださいよー。パチュリーさん一人じゃ迷っちゃうんですし！」

「なら、煉、早くしなさい」

とりあえず、今、この考えは忘れておこう。

閑話。パチユリーさんと共に聖夜を過ごしました。

クリスマス。

それはキリストの生誕を祝うための祭り事。子どもならば、サンタさんからのプレゼントがもらえるということ。で気持ちが高じる日であろう。

カップルは互いにプレゼントを贈り合って、イチヤイチャするのだろう。

学校ではやめてくれ。せめて、他人の目に入らないもしくはそういう奴らが跋扈しているスポットに行ってくれ。俺の精神がもたないんだ。

「やあやあ非リアの煉さんや」

「どうした、家族も出かけるからクリぼっちのAさんよ」

「ど、どど、動じてはいませんぞ！」

「落ち着けや」

クリスマス？ そんなものは俺にはないのだ。友人Aと俺はクリぼっちなのだ。メリークリスマスじゃなくてメリークルシミマスなのだ。

そんな互いの俺とAは中学から、クリスマスの時にはAの家に集まり、リア充を呪おうというのが恒例となっていた。

その時のAの部屋からは重苦しい低音の呪詛が流れ出ている。そのため、クリスマス時にはAには近づくなという命令がAの家庭内で出ているらしい。

つまり、Aの家族はAから離れるために出かけるのだ。

「ふははは！ お前も今年は家族がいない独りぼっちのクリスマスだ！ 一緒に聖なる夜を呪おうぞ！」

「あ、すまん。今年は有事あるから無理だわ」

「非リアを卒業したというのか、煉よ」

「ま、そういうことだから呪うなら1人で呪つとけ、万年クリぼっち」

そうこうしているうちにいつの間にもやら授業は始まっていたようだ。当然ではあるが、騒いでいた俺とAは怒られた。

「ただいま帰りました」

「おかえり、煉」

ヤバい、昇天しそう。

クリスマスの日を一緒に過ごしてくれる人がいる。その人が自分が大好きなキャラクター、パチュリーさんだという事実には俺はただただ、感動を覚えるしかない。

パチュリーさんはせつせと台所の片付けを終え、ブルーライトをカットする眼鏡をかけて、パソコンを起動する。

「煉、今日は外出しない？」

パチュリーさんからの誘いとは珍しい。

外へ出る時は大体、俺の方から誘って、パチュリーさんの気分によって、外出するかしないかは決定される。

そう、この家において、パチュリーさんは圧倒的君主におられる御方。パチュリーさんのお誘いに対して、私めのような愚民に拒否する権利などないのだ。

「私のような雑種にそのようなお声かけなど……、なんと慈悲深きお方」

「煉、返答は」

「何をおっしゃいますか。私にYES以外の選択肢など存在しません」

「なら早く準備しなさい。私も準備するから」

「仰せのままに」

あれ、自宅のパートこれで終わり？ という疑問を抱いた人に言っておこう。

その通りだ。

今現在、電車の中で揺られております。

パチユリーさんも電車に慣れてきたのか、最初の頃のような危うさというものはなくなっていた。それはそれで寂しいものがあるというのは、パチユリーさんには内緒である。

パチユリーさんの服装は薄紫のセーターに短めの黒いスカート、黒ストを履いて赤いチェックのマフラー装備。かわいいというものを通り越して尊い。後光が差しているようにも見える。

「何、じっと見てるの」

「かわいいので」

「そう」

短くパチユリーさんは返したが、マフラーの中に少しだけ顔をうずめたように見えた。

「パチユリーさん、ここは……?」

毎年、俺とAがこの日に呪おうとしている場所ではないか。そして今年も、Aが恐らく地図に釘を打ち込んでいるであろう場所ではないか。

「世間一般では今日はクリスマスというのでしょう?」

「ええ、まあ」

「それであれば、そういった場所に赴いて文化を見てみるというのが効率のいい学び方ではなくて?」

正論、正論なのだ。

パチユリーさんの言っていること、それはあまりにも正確すぎて、俺は少し泣きそうなのだ。ここは俺にとって毎年恨んでいる場所だ。そんなところに大好きなパチユリーさんと一緒にいられる。そのことがどんなに嬉しいか。

「煉?なんで泣いてるの!?!」

「あれ、なんででしょう。ここにパチユリーさんと一緒にいられることが嬉しすぎて」

いつの間にか、涙を堪え切れなかったようになっていたようだ。

涙を流しながらではあるが、俺はカバンからプレゼントを取り出す。

「あの、そこまで良いものじゃないですけど」

パチユリーさんはプレゼントを手に取り、包装を外した。そして、包装に包まれていた箱を開けると、それは眼鏡だった。

パチユリーさんがいつもかけているものはブルーライトカットの眼鏡であり、何かお洒落な要素もクソもないような黒いゴツゴツとしたフレームのものだった。それであるならば、お洒落眼鏡とかプレゼントしても良いんじゃないかなあと、ない頭なりに考えた結果だ。

「ふふっ、ありがとうね。煉」

「っ……」

いつも見ている笑顔だというのに、なぜだろう。その笑顔が綺麗で、いつもとは違うように見えた。イルミネーションのせいだろうか。

「どうしたの、煉」

「いえっ、なんでもありません」

激しい熱を帯びた顔は冬の夜の寒さですら、冷やすのには時間がかかりそうだ。

「それじゃあ、今日はこれをかけて過ごそうかしらね。煉、あなたに聞いておきたかったの」

彼女は知ってか知らずか、紫に光る木の前でこちらへ振り向いた。

「あなたにとって、私はどんな存在なのかしら」

その言葉は、俺にとって言葉を詰まらせるものだった。何か、答えなければいけない。しかし、答えが見つからない。当てはまる言葉が出てこない。

「答えは今すぐには求めないわ。だから、今はこの時を楽しみましょう？」

「……、分かりました」

ただ、彼女と一緒にいられることが幸せである。だから、パチユリーさんと一緒にいたい。

そのことがどのような感情なのか、俺には判らなかつた。

19話 パチユリーさんはどんな服を着ても似合っています。

服を見に来たということ忘れていたのか、4階に書店を見つめるや否や、いつもとは違うスピードを出してパチユリーさんは書店へ入っていった。

本の中身を読んでいるかのようにじつくりと眺めていた。その目は真剣そのものであり、俺のような一般人には分からない価値を見つけ出そうとしているのだろう。

「ふうん？ 外来本で見たことあるものが何冊かはあるわね」

書店ではある作者が亡くなったことでの、「○○先生、今までありがとう」というのぼりがある。パツと見ても、最初期に書かれたものは本当に分からない。

売れなくなり、読まれることがなくなったものが幻想郷の方に流れ着くのだろう。

「こんなものか。待たせてしまつて悪いわね、煉。行きましょう？」

「あ、はい」

さつきまでの雰囲気とは打って変わって、とても柔らかい。もちろん、俺はどんなパチユリーさんであつたとしても大好きである。たとえば、それが今のように柔らかな雰囲気を纏っていたとしても、先ほどまでの熱量を感じさせられるとしても。

しかし、その熱がほんの少しだけでも、こちらに向くことを期待してしまつた。

「どうしたのよ、煉」

「いえ、特に何もありませんとも」

確かに今の生活は幸せなものだ。それは疑いようがない。

しかし、パチユリーさんが幻想郷に戻つてしまえば、俺はどうなつてしまうのだろう。まだ彼女と出会つてから1週間ほどである。こんなことを考え始めてしまうことは早いというのに。

「この周辺が女性服売り場になります。気に入った服がありました

ら、なんなりと行ってください。財布と相談ってなりますけど。あと、ここではあくまでお洒落用の服を買うだけですので、5着も買えないことを先に言っておきます。普段着用は他の店で」

「分かったわ。そこまで私は服について興味はないし、センスに自信もない。悩んだらあなたに頼るわよ、煉」

責任重大な任務を依頼された気がした。

しかし、パチュリーさんからの依頼だ。遂行してみせようではないか。

「いらつしやいませー、どういったものをお探しでしょうか？」

おおっと、その道のプロがここに入ってきた。パチュリーさんには申し訳ないが、ここはひとつ、店員さんの意見に従ってもらおう。そちらの方が、服のセンスが皆無の俺にとっても、パチュリーさんにとっても良いことだろう。

「そうね、ゆったりとしていて、紫が服のどこかに入っているといいわ」

「それならー」

「ら」の音を極限にまで引き伸ばし、店員さんはバーにかかっている服を見始めた。ちらちらとパチュリーさんのことを見ながら、似合う服を探している。

「こちらはどうでしょうか？」

そう言つて、店員さんがパチュリーさんに手渡したものは、紐が紫でシンプルな白のワンピースと淡い紫のブラウス、見た目でも分かるぐらいに柔らかい生地の子ズ。

「ふむう……、どっちもいいのだけれど……」

「お悩みにならているのですしたら、彼氏さんを選んでもらっては？」

なんですと!?

いや、選ぶということに対しては何の驚きもない。俺が驚いているのはその直前の言葉。

彼氏さん？ いやいやそんなめっそうもない。こんなにもいと尊き御方であられるパチュリーさんの彼氏なんていう大層な役回りは私には未分不相応でございます、先ほどしてしまった愚考がこの人に

バレてしまっていたのであれば致し方あるまい謹んで謝罪させていただきますのでどうかパチユリーさんにはお伝えしないでください
どうかお許しを。

「そうさせてもらうわ」

あの、パチユリーさん？

「ねえ煉、どっちの方が私に似合ってるのかしら……？」

ゴフツ。

顔を赤らめてこちらに振り向いてきた。少し顔を服で隠している。
先ほどの言葉はパチユリーさんにとって恥ずかしいものだったのだろうか。

可愛いです。

いや、そこじゃなくて。

真面目にパチユリーさんの質問に答えよう。

ワンピースは普段のゆったりとした服で隠れていた白い肌が露わになる。その白い肌が肩紐の紫が映える。

ブラウスはパチユリーさんが現代に来た際、このような服装なのだろう。それほどまでに似合いそうなのだ。

パチユリーさんは何を着ても似合うのではないのか？

それなら納得だ。彼女に似合わない服などこの世から焼き去ってしまえばいいのだ。

「どっちも似合ってますし、両方買いましよう」

即決で何も問題なし。

「お金の方は……」

「足りなかったらATM行きますんで、無問題です」

「問題大ありなんじゃないの？ それ」

20話 パチユリーさんの頼みごとをしていないことに言い訳はありません。

パチユリーさんの私服を買いに行ったところから時は進み、自宅に帰ってきた。

まだまだ俺は若いというのに、なんだか1週間分の疲労が一気に今、身体を襲っているような気がする。

「帰って早々、へたりこむなんてダラシないわね」

この疲労は肉体的なものではない。精神的に疲れきっているのだ。理由は決まっている。パチユリーさんが可愛い。ただそれだけに尽きる。

パチユリーさんが可愛いことが精神的に不衛生というわけではない。尊い、マジでしんどい。

この感情は誰にも侵されない聖なる感情である。

「パチユリーさん、先にリビングに行っておいてください」

玄関で倒れこむことに決めた俺はパチユリーさんを先にリビングに行かせる。

供給過多になっているから、少しでも落ち着けるためということもある。それよりも自分の考えを整理しなければならぬ気がするのだ。

俺は確かにパチユリーさんのことが大好きだ。それはあくまで、恋愛対象としての好きではない。クラスの女子が言ってる推しとやらの部類だ。

しかし、パチユリーさんを目の前にしている現状、俺はパチユリーさんに何を感じているのだろうか。

俺からパチユリーさんに対し、何も求めることはないと何度も言っている。今回の買い物でどうやら何かを求めているような気がするのだ。

それは何か。

パチュリーさんが俺のことを好きになつてくれないか、なんてことを考えているのかもしれない。それはありえないと即座に否定するが、口先ではなんとでも言える。本心ではどうなのか。

「まあ、恐らくはそうなんだろうよ……」

テレビでよく見る光景だ。ドッキリのために俳優や女優が仕掛け人である一般の人と何かしらの関係を持っているという光景。その時、たいていの人は恋人やそうであったという設定にする。

簡単に言えば、俺の今のこの感情もそれと同じだ。

後のことを考えずに、一時の夢を見たい。

なんて馬鹿げた話だ。パチュリーさんは幻想郷の住人。一度目の前から消えてしまえば、もう会えることはなくなるというのに。

「煉、いつまでそこにいるつもりなの？ 早くしなさい」

「はい」

答えは簡単には出てこない。

足枷にならないよう、丁重にこの問題は扱わなければならない。

「煉、一つ質問なんだけれど」

「いかがしましたか？」

パチュリーさんの前では口調が安定しない。いつものですます調だけでなく、古文で出てくる「はべり」とか「たまふ」とかよく使う。

オタク特有のものだろうと、俺は思う。

「葦子に関することを頼んだ記憶があるのだけれど、進んでいるのかしら？」

その言葉を聞いた瞬間、自分の可能な限りの速さでパチュリーさんの目の前で土下座をする。

「本当に申し訳ありません！ 董子さんの学校の場所までは特定したのですが、そこから一切進んでおりませぬ！」

「いや、とりあえず顔を」

上げろと言われても今は上げることが出来ない。頭を床に擦り付けることが何も言われない状態で俺ができる唯一の謝罪なのである。「本当に申し訳ありません……。このようなつまらなき者に言い訳などございませぬ。どうぞその手で処断を……」

「そこまでするつもりはないから、とりあえず顔をあげなさい」

それから軽く10回ほど、このやり取りを繰り返して俺はやつと顔をあげた。

「ちよつと、額がやけどしてるんだけど」

「ええ、おそらく土下座をしたときの摩擦でやけどを負ってしまったのだと思われます。これでは何もお詫びすることが出来ません。ご命令とあらば、今すぐにも首を吊って」

「話を聞きなさい」

「分かりました」

パチュリーさんは少し怒り気味である。

それもそうだ。パチュリーさんの頼みごとをやっていないなかったのだ。どのような命令でも構わない。死ぬと言われれば今すぐ死のう。

「まず、理由を聞きたいのだけれど」

「言い訳になりますので、言う価値もありません」

「はあ……、いいから、理由を言ってちょうだい」

「分かりました。単純に、パチュリーさんと一緒にいられる時間を少しでも長くしようとしていたのです」

「ふーん？」

言い訳、と言われても仕方がない。やらかしている時点で、その理由や原因は事実であったとしても、全て言い訳に過ぎない。そのことは重々承知している。

「私は、あなたが進めていかなかったことに対して怒っているのではないのよ。話を聞かないあなたに対して、今は怒っているの」

「……はい」

「理由も分かったし、私は驚いている方よ？ 1週間で学校ではあるけれども、場所を特定したって」

「お褒めに預かり、光栄です」

パチユリーさんに褒められると、なんだろう、こう、ムズムズする。

「特定しているのであれば、明日は……」

「月曜日です。遂行することは可能かと、なので」

「ええ、お願いね」

忘れないようにメモしておかないとな。

土下座の勢いと摩擦でジーパンの膝下辺りが少し色落ちしてしまっている。気に入っていたものだが、まあいいだろう。この程度でパチユリーさんから許してもらえたというわけではないが、見逃してもらえたのであれば必要な犠牲だ。

21話 パチユリーさんの依頼を遂行します。

もし、この依頼がパチユリーさんが幻想郷に帰ることに直接繋がるのなら、俺はどうすべきなのか。

どうせ、帰ってしまうのだ。それが早いか遅いかの話だろう。

「おい煉、昨日の古文を詳しく教えろ」

このように国語系統を教えろと迫るのはAである。というより、俺には不運にも友達と呼べる存在はAしかいない。非常に残念なことだ。

「おいA、お前、予習復習はどうした」

そう返すと、Aは驚いたような表情を見せてからすぐさまドヤ顔へと移行する。今回は期待してもよいのだろうか？

「そんなもの、俺がやっていると思っているのか？」

殴りたいこのドヤ顔。

「そうだな、ならばこう言おうか。いつから俺が復習していると錯覚していた？」

「なん……、だと……！ って言ってもらいたいのかもしれないけど、その系統で俺はこう言おうか」

「次にお前はこう言う！」

「別にお前をぶん殴っても構わんのだろう？」

「ハッ！」

なんてコント的なものを繰り広げつつも、帰る準備を進める俺である。

「煉、お前まさか帰るとか言わねえだろうな？」

「そのまさかだよ、今から俺はちよつと用事があるからそこに向かう」

「テスト3週間前の俺を殺そうというのか……?！」

勝手に殺されてろ、と言いたいところではあるが、それを言えばこいつは喜んで俺に絡んでくる。それでは、時間がかかりすぎる。

リュックを背負い、振り返らないまま教室を出た。

その時、Aの悲鳴が聞こえたような気がするが恐らくは気のせいだろう。

自転車に跨り、東深見高校までのルートを確認する。

隣の隣の市ということはかなり遠いと踏んでいた。しかし、意外にも近いと分かると、やはりやる気にもつながってくるものである。

漕ぎ出してすぐにもいつもの帰り道のルートを辿ろうとしてしまったことは言うまでもないだろう。

疲れた。行き道にあんな急勾配の坂があるなんて知らない。時間はそこまでかかっているのではないのだが、それとは不釣り合いなほどに体力は奪われていた。

「東深見、東深見」

マラソン後に歩くように、ゆっくりと自転車を走らせる。

こちらへ向かってくる制服姿を発見。恐らく、この道をまっすぐに辿って行けば、あの制服姿が多くいるはずだ。そこから探せば良い。そう腹を括り、ラストスパートをかけるように大きく漕ぎ出した。すると5分もしないうちに東深見高校は見えてきた。

「ほーう？」

私立というだけあり、制服も綺麗だし校舎も綺麗である。

ここから董子さんを探すということをやめるのだが、無理難題な気がしてきた。チェック柄の制服ということはここで合っているのだろう。しかし、この人の波からたった一人だけを探すとすれば、学校を探すことと比べるとかなり違うだろう。

「詰みゲーか……？」

そんなことを言っているも仕方がない。待つか突貫するか。幸いであるのかどうかは判断しかねるが、俺は違う制服のため目立っている。そのため、人の流れは俺を避けるように動いていた。

「あの一」

「は、はい。なんででしょうか……？」

おもむろに男子生徒に話しかけてみたが、思いつきり警戒されている。まあ、知らない人に話しかけられると警戒するよな、うん。

「宇佐見董子さんってどこにいるか知ってます？」

「董子って秘封倶楽部の？」

どんぴしゃり。最高のスタートだ。もしかすると、変な生徒として広く認知されているのかもしれない。そんな考えはほどほどに、話を続ける。

「宇佐見董子さんなら恐らく、昼寝のお叱りを先生から受けていると思うので、あと30分くらいかかるかと」

30分か。待てない範囲ではない。適当に時間を潰していたらとつくに過ぎる時間であろう。それにもう後にも引けない状態だ。30分どころか1時間でも待ってやろう。

「ありがとうございます」

「いえいえ」

話しかけた男子生徒はお辞儀をして俺の目の前を通り過ぎていった。礼儀正しいなあと思っていると、遠くから何かコソコソと声が聞こえる。

なんだかあの人も苦労してるなあ、なんて言葉が聞こえてきそうだ。

事実ではあるが、グツと堪え、東深見高校の正門前で待つことにする。

22話 パチユリーさんの事情を話す前に警戒されるのは当然のことです。

待ち続けて30分。

周囲の学生も少なくなり、この辺りを通るのは外周を走っている運動部やら吹奏楽部だ。あと1時間ほどしてもこのルートから帰らないという場合には、仕方がない。こちらが折れて帰るしかあるまい。そこから15分後、ソシヤゲをしてもさすがに飽きてきた。何かいい暇潰しがないかとリュックの中を探そうとし、顔を上げる。すると、校門の奥に1人の人影が見えた。姿はまだ小さいため身長での男女の判別は難しいが、膝上のシルエットの膨らみに考えるのであれば女子であろう。

「ようやく、ラスボスお出ましってこっか!」

ラスボス、ではない。深秘録では確かにラスボスではあったが、今はその風格はなく、ただの夢見がちな女子高生である。

シルエットが近づくと、克明にその姿は見えてくる。

丸い眼鏡の奥には不機嫌な表情。一見地味には見えるが、道行く生徒たちも避けてまで、彼女の道を通ろうとはしない。間違いなく、あの人は董子さんであろう。

「あのー、すみません。宇佐見董子さんですか?」

話しかけた瞬間、攻撃的な目つきでこちらを睨んだ。

「ええ、そうですか」

「俺は榊原 煉って言います。幻想郷について、今現在調べています」
幻想郷、というワードを聞いた瞬間に彼女の目は大きく見開かれたが、すぐさま元の目つきに戻る。

「そうですか。残念ながらそんなところ、私は知りません」

いやまあね、警戒されるのは当然の結果なんです。警戒しないっていう方がよっぽど大丈夫かって俺の方が心配してしまう。

ただ、敵意剥き出しではないということは分かる。敵意剥き出しであれば、サイコキネシスで遠くに俺を追いやればいいだけの話だから

だ。

「えっと、その、パチユリー・ノーレッジさん、がこつちの世界に来ていて、パチユリーさんが帰るために手伝いを今、俺はしています」

その証拠に、とスマホの中に保存されている写真を見せる。

写真に写るパチユリーさんの姿は料理を作っているときのものである。もし、これがパチユリーさんに見つかってしまえば、良くても大きく怒られる、普通であればパチユリーさんの手によって処断されるであろう。しかし、それを覚悟してでも手に入れたいほどの逸品である。

「ええっと、コラには見えないけど……」

むむむ、と唸る董子さん。

何かを決意したのか、顔を勢いよくこちらへ向ける。正直なところ、かわいいな、と思った。口が裂けても言うことはないのだが。

「その話だったらどこか人目のつかないところで！」

そう言われながら、右腕を引っ張られる。

「あつちよつと、あの、自転車をどこかに停めてから！」

何も無い路上に駐輪した状態で、為されるがままに引っ張られていく。話をしている間に、お巡りさんがあの自転車を違法駐輪として持っていかないことを願うばかりである。

23話 パチュリーさんの元へ董子さんを連れて
行きます。

為されるがまま引き摺られて、入ったのは東深見高校から離れていない場所にある喫茶店だった。学生達のピークはとつくに過ぎたのか、人気はなかった。

「アイスコーヒード」

「それじゃあ、俺も同じもので」

注文を済ませ、董子さんと向き合う。

改めて見ると、やはり可愛いという感想が出てくる。東方に出てくる女性は全員美形なのだろう。しかし、パチュリーさんの可愛さには程遠い。ベクトルが違うとも言えはいいのだろうか。

主観が入るが、パチュリーさんはもちろん可愛いし、美人であると、百人に聞いても百人ともそう言うに決まっている。董子さんはどうだろうか。パチュリーさんはどこか儂げというか病的というか、そんな雰囲気を抱かせるに対し、董子さんは健康的な白さである。確かに夜更かしをしているだろう。けれども、現代の日本人における可愛いというのでは、董子さんは最上級ではなからうか。

「どうしたのかって心配になるレベルで私の顔を見るわね」

「すみません、やっぱり他人というのが慣れないので」

董子さんに可愛いなどと言ってみようものなら、俺は今ここで腹を斬ろう。可愛くないわけがない。しかし、俺の推しはパチュリーさんなのだ。俺は推しへの忠誠心は一途であり、不屈である。絶対に折れるものか。

「お待たせしました」

そう言つて、店員さんはアイスコーヒートをテーブルの上に2つ並べた。

ミルクと砂糖も同時に出された。どこの国が産出している豆だとかは分からないため、とりあえずブラックのまま飲む。しかし苦い。苦めのものを好む節はあるが、ブラックはやめておきたいと先月決心

したはずなのに。おそらく、董子さんの前でカッコつけたかったのだろう。

可愛い女子の前でカッコつけたいというのは、全男子共通のことなのだ。許してくれとは言わない。覚えておいてほしいだけなのだ。

「で、幻想郷のどういったことを調べてるわけ？」

「先ほども言った通り、パチュリーさんが幻想郷に戻る方法を調べているんです」

ふーん、と董子さんは少し考え込む。考えるということは何かしら心当たりがあるのだろうか。

それであると、パチュリーさんの帰る手段が早く見つかったということ、とても喜ばしいことだ。

「確かに、私は夢の中で幻想郷に行けるわ」

「それなら、同時にパチュリーさんも夢の中へ連れて行ったら」

「それが出来るか分からないし、何より問題なのは私が幻想郷にいられるのは一時的。もし、パチュリーさんとともに幻想郷に行くことが出来たとしても、私が目覚めてしまったらどうなるのかも全く分からない」

けれども、と言葉が出そうになるがすんでのところグツと堪える。試してみるべきだとも言えないのが、今の俺の立場なのだ。当人であるパチュリーさんの手伝いでしかない俺が否定も肯定も出来ない。

そうなる、必要になってくることは一つだけである。

「董子さん、一つだけお願いしていいですか？」

「ええ、私に出来ることならね」

一歩間違えたら誤解される一言ではあるが、今のこの状況なら必ず意図を汲み取ってくれるだろう。

「俺の家に来ませんか？」

「えつとー、その意味はパチュリーさんと会ってほしいって意味であってるよね？」

「ええ、その通りです」

とりあえず、パチュリーさんからの第1ミッションクリアー、とい

うことで董子さんを連れて帰ろう。

「そうそう、今からレポートするから座標教えて」

「あの、さすがにそこまで考えては来てないです」

「え、嘘。私を探しに来たって言うんだったらそこまで考えなさいよ！」

「それに、今からレポートするってことは無銭飲食ですよ！」

「知らない！あんたが払って、男でしょ！」

「理不尽すぎませんか？」

なんだろう、すごく高校生らしいやりとりをやっている気がする。

24話 パチユリーさんと董子さんのよく分からない会話には参加しないようにしましょう。

「お邪魔しまーす……」

「ただいま戻りました、パチユリーさん」

自転車が警察の方々に持って行かれることはなく、無事に麗しのパチユリーさんの居候する自宅へと帰ってきた。パチユリーさんを見て、今日一日の疲れを吹き飛ばしたいところではあるが、パチユリーさんと董子さんを会わせるのが優先である。

「お帰りなさい、煉」

角のところから、ひよこつと顔を出したパチユリーさん。

その行為だけで私の疲労は吹き飛んでしまった。優先とか言っていたのに、もう満たされてしまった。

しかし、ここでそんな素振りを見せてしまったのはパチユリーさんはまだ何度もそれを見ているからいいとして、董子さんからは変人扱いされてしまうだろう。せつかく持ったコネクションなんだ、無闇に手放してしまつては本当に勿体無い。

「パチユリー様、宇佐見董子様をお連れいたしました」

「ありがとう。手を煩わせてすまないわね」

「なんとも勿体なきお言葉……!」

背後からの視線が痛い。今絶対董子さんはなんだこいつつて思ってる。俺には分かる。だって背後からの視線、すごく冷たい。

「私と董子用のお茶を出したら休んでおきなさい」

「はっ」

「ねえ、この家の中の上下関係どうなっているの?」

ほら、知ってたよ。

俺のこの態度を見たら大体引かれるのはなんとなくでも知ってたよ。声音に呆れが入っているの丸分かりですよ。

そんなことを考えながらお湯を沸かす。

パチユリーさんと董子さんはテーブルを挟んで向かい合う。

「えつと、夢とかじゃないよね、パチュリーさんでしょうね？」

「ええ、勿論」

「まず質問があるの。あいつっていつもあんな寸劇をやる感じ？」

「コンロの前でお湯を沸かしている俺を指差し、董子さんは質問する。」

その言い方はやめてほしい。あんなとか、別にいいじゃないか。推しが目の前に現れて、居候するってなったら絶対にオタクはあなるって、絶対に。」

「ええ、そうよ。けれども寸劇ではなく、あれが煉の素なのよ」

その通りである。

うわあという董子さんの声が聞こえてくる。あなたも全能感に酔いしれた厨二病だった時もあったでしょうが。そのせいで現在も、現実では友達出来ていないんでしょうが。」

「じゃあ、話し合いをしましょうか」

「ええ、そうね」

董子さんの言葉を合図として、パチュリーさんと董子さんは話を始めた。

夢魂やら夢の存在やら、確かに聞き覚えはあるけれども、俺にとってはよく分からないと言える言葉が出てくる。こういう時には、話は聞くだけ聞いて、何も口を挟まないのが得策だ。その後で、ゆっくりと咀嚼しながら理解することが1番の正解だろう。」

「パチュリーさん、董子さん、お茶が入りました」

ありがとうございますと、2人から感謝の言葉をもらう。そして2人はまた意識を会話へと集中させる。

2人の意識が再びこちらに向かない距離でありながら、2人の会話の内容が鮮明に聞こえる程度の距離で正座待機。パチュリーさんと董子さんの会話の単語を1つ1つ脳内に必死にインプットしていく。

「もうこんな時間か、帰るわね」

「ええ、貴女がいない状態より格段に進んだわ」

現在の時刻、午後7時30分前。

1時間半ほど彼女たちは幻想郷に帰る方法について考えていた。

「パチュリーさんってスマホは持ってるの?」

「持ってないわ」

1時間半ぶりの董子さんの痛い視線がこちらに向いたような気がした。さすがにこれには反論させて頂くとしよう。

「あの、董子さん。俺の状況を鑑みて言ってもらいたいものですよ」

「じゃあ、なぜ?」

「ただの一介の男子高校生に携帯代を2つ分支払えるほどの財力があるとも思っているのですか?もし、パチュリーさんがスマホをお持ちになられたとしても、その時には俺がスマホを捨てるという決断を」

「理由は分かったから、落ち着いて」

やれやれと、董子さんは溜め息をついた。どうしてパチュリーさんにそんな質問をしたかは分からないが、とりあえず理由は分かったようだった。

この場においては、俺の勝ちということだ。

「えっと、じゃあ煉だっけ?」

「そうです」

「それじゃ、スムーズな連絡がとれるように、L I N O交換しておきましょう」

は?」

いやいや、至極当然のことである。董子さんの言いたいことは分かるし、もったもなことだ。

動揺しているのは簡単で、女子のL I N Oを手に入れることが出来るというのが嬉しいのだ。

俺のL I N Oには友達が、今は殆ど連絡を取っていない中学の頃の

友達と非常に残念なことにAのものしか入っていない、非常に残念なことにAしか連絡を取っていないのだ。

そんな非リア街道まっしぐらだった俺のLONEの連絡先に董子さんが入るのだ。嬉しくないわけがなからうて。

「はい、えっとQRコードで大丈夫です？」

「ええ、無問題よ」

知り合いのところに董子と出る。

これで董子さんのLINEゲットだぜ。もしかして、かなりレアなものでは？

「それじゃ、何か用事とかあったら送ってきて。私からもちゃんと分かったら送るから」

そう言つて、董子さんは目の前から消えた。比喩表現ではない。文字通り消えたのだ。

「あれ、董子さん消えましたけど」

「あら、テレポートを知らないのかしら？」

「ああ……、目の前で行われるの初めてだったので分かりませんでしたよ」

一応納得はした。

けれど、現実で知つても、テレポートで瞬間移動されたら誰でも同じ反応を見せるわコンチクショウ。

25話 パチュリーさんの久しぶりの他愛のない
会話です。

董子さんがレポートで帰って、東の間の休息。

「そういえば、結果的にどんな結論に至ったんですか？」

「董子が幻想郷にまず行って、私がいなくなっているか確認するそう
よ」

もしこの世界がパチュリーさんにとっての夢であるのならば、夢の
存在が幻想郷に現れる。そして、それはパチュリーさんの収まってい
た席に、無理やりにも座ろうとする。

董子さんは、それがどうかを確認するのだろう。

「そうですね、ちよつと遅くなりましたけれども晩ご飯にしましょう
か。何か食べたいものありますか？」

「うどんとやらをお願い。具材とかは煉の好きな風にしてちょうだ
い」

「御意」

さて、油っこいものはパチュリーさんの身体の調子が悪くなるし
……。

「出来ましたよ。シンプルですけど、かけうどんです」

「ありがとう、煉」

出汁に薄口醤油とうどん玉を入れて、ネギを多少入れただけ。超簡
単。

本来なら2玉使う予定だったけれども、パチュリーさんの食べる量
を考えると、恐らく1.5玉、もしかするともう少し少ないかもしれ
ない。

「いただきます」

麺をすする音が重なる。

きつねうどんやらカレーうどんやら考えたのだが、パチュリーさんの身体のことを考えるとこれ以外の最適解がない。

出汁は残っているし、明日の朝ご飯用に雑炊をしておくのも悪くない。

「あっさりしていていいわね、これ」

「お褒めに預かり光栄です」

なるべく音を立てないように、出汁を飲む。シンプルであるがゆえに美味しいのだ。

そういえば、といった感じにパチュリーさんが私めに御言葉をおかけになった。

「今日、董子に言われたことを覚えてるかしら？」

「はい、ある程度のことば」

「話が早くて助かるわ」

そう言つて、空となつた容器を流しの方に運んだ。

次は俺に何を命じられるのか、それを待つ。どんなご命令であろうとも、この世で不可能なこと以外ならばやってみせる意気込みである。なんなら不可能でもこの世の原理さえ捻じ曲げることが出来れば……。いや、さすがにそれは無理だ。厨二病は抑えよう。

「これまでの変な言葉遣い禁止よ」

「そんな殺生な?!」

なんと……。いう、ことだ。

これではパチュリーさんに最大の敬意を表する事が出来ない！

更にはパチュリーさんに話をする事が出来なくなる！

「辛いことでもないでしょう？」

「そんな、小生には貴女様と対等ではございません！ 小生が高貴なる貴女様と話すことが出来るのはこの状態でなければ無理なのです！」

オタク特有の早口。

捲したてるように喋ったせい、パチュリーさんは若干引き気味で

ある。

「だから、だから……！ 後生の頼みで……！」

「却下」

ガーンという効果音が付きそうなほどに俺は落ち込む。

笑った奴がいたら俺はそいつをぶん殴る。

「別に敬語を外すってことじゃないのよ」

「それでも……！」

俺が土下座してまで懇願している、この風景を側から見ればただの哀しい奴だという感想を持たれるだろう。その程度のことを考えることが出来るほどには、頭は冷静になっていた。

この命令は別にそこまで悲嘆することじゃない。先ほどまで、俺は何を考えていたのか。全くもって思い出せない。

今はあれだ、ひとしきりハシヤいだ後に来る賢者モードって奴だ。

「分かりました」

「え？ 手のひらの返すスピードが早くないかしら？」

「その通りですけども、普通に考えて何もそこまで嘆くことでもないかなと思います」

パチユリーさんは困惑したような目をこちらへ向ける。

それもそうだろう。つい40秒前まで土下座してまで撤回を懇願していた男が急にその命令を受け入れたのだ。よほどのカリスマ性とか計算高い人じゃなければこんなこと予想が出来ない。

「ならいいけど。煉は明日の準備をしなさい」

「分かりました」

明日、明日……。あ、Aが古文のテスト勉強を手伝ってくれて言っていたのを断って董子さんに会いに行ったのだった。明日のAの絡みが鬱陶しいだろう。

「パチユリーさん、明日学校行きたくないです」

「行きなさい」

「はい……」

26話 パチユリーさんは体育祭という行事に興味があるそうです。

前回からはおよそ、2週間ほど時が飛んで、6月ほどのころ。

1学期中間のテストも無事終了し、勉強漬けの毎日から一時解放された。しかし、忘れてはいけけない、日本の悪しき風習、体育祭があるということ。

陽キャのスポーツマンが大活躍。何が悲しくて俺のような運動をあまりしていない陰の者がそいつらの踏み台にならねばならないのか。甚だ理解に苦しむ。

「珍しく浮かない顔をしているわね」

「それもそうですよ、体育祭なんて行事があるのですから」

体育祭、スポーツフェスティバルとでも言うのだろうか。その辺りの知識はないが、全く以って汗臭いし、6月の中旬で屋外でやるという。熱中症で倒れさせたいのかこの野郎。

過去あつた体育祭にいい思い出など、一つもないのだ。

愚痴り出すともうやめられない、止まらない。さながらかつぱとえびが名前に入っているスナック菓子のようだ。

「学校行事なのであれば、参加しなさいよ」

「強制参加なので辞退もないんですよ」

「そう……」

パチユリーさんは考え込むような仕草を見せる。

何を考えているのだろうか。特訓メニューでも考えているのだろうか。もしそうだとすれば、俺は全力でパチユリーさんから逃げる準備をする。パチユリーさんには本当に申し訳ない。心が痛むが、これだけはやむを得ないことなのだ。

そんなくだらないことを考えていると、パチユリーさんが口を開いた。

「その体育祭っていうもの、見に行ってみようかしら」

この、紫の衣服に身をお包みになられたいと尊き御方はなんとおつ

しやられましたでしょうか。

体育祭をご覧になるとおっしゃったのでしょうか。パチユリーさんが外へ出ると。

「煉、呆けてどうしたの」

「いや、聞き間違いじゃなければパチユリーさんが体育祭に来るかもしれないということを聞いたような気がして、かなり驚いています」

「聞き間違いではないわよ」

確かにパチユリーさんが体育祭へ来てくれるというので、あれば俺は諸手を上げてそれを歓迎するだろう。しかし、パチユリーさんが熱中症で倒れないか心配なのだ。

「えっと、来ることは別に何も問題はないのですが、それには1つ条件があります」

パチユリーさんは首を傾げる。

その条件とはとても簡単。俺とパチユリーさんのことを知っている人間に、パチユリーさんの付き添いに来てもらうこと。その人間というのは1人しかない。

「董子さん、お話が1つあります」

「そうでしょうね、じゃないと通話アプリであなたと通話なんかしないもの」

そう、董子さんである。

もし、董子さんが嫌だと断ればパチユリーさんは来ることができない。そういう条件なのだ。

これに関しては、パチユリーさんから承諾を受けているため、あとは董子さんの返事次第なのだ。

「で、話って何なの？」

「えっとですね、再来週にある僕の学校の体育祭に来ませんか？」

「丁重にお断りするわ。そう言われるのは知ってたでしょ？」

その通りである。

彼女はとても警戒心が強い。その情報は董子さんとの初接触の時点で得ていた。しかし、それともう1つ。

こちらがパチュリーさんを引き合いに出せば、話はまた違ってくるのだ。

「来てほしいんですよ」

「なんでそんなに来てほしいのよ。私みたいな陰気くさいのよりパチュリーさんでも誘ったらどうなのよ」

「いや、そのパチュリーさんががつつり関わってくるんですよ」

「え、どういうこと？ 説明しなさい」

とりあえずではあるが、パチュリーさんとの会話を簡略化して、董子さんに伝えた。

その後、彼女はしばらく悩んでいた。

「あの、無理しなくてもいいんですよ。行きたくないっていうのであれば断って、パチュリーさんもそれだったら諦めるということをおっしゃいますし」

「いや、行くわ。パチュリーさんが行きたいって言うてるんですよ。」

おそらく、今後は一切見る機会がなくなるでしょうし」

董子さんはなんとも優しいお方であった。

「なんか失礼なこと考えてない？」

「いえ全く」

東方の登場人物は全員、遠隔でも心を読めるような能力があるのだろうか。そう思えるほどに、パチュリーさんにも董子さんにも思考がバレている気がする。

ああ、でもそうなら今度はさとり様の能力が産廃になってしまふ。

だとしたら、女の勘って奴だろうか。そうだとするならば、これからは思考にも気を遣わなければならぬ。

27話 パチユリーさんにカツコ悪いところは見せたくないのです。

「おい、A。お前に話しておくことがある」

「なんだ、結局俺に古文を教えずに欠点スレスレを歩ませた男よ」

Aはそれを未だに根に持っている。本当に器の小さな男だ。テストの翌日、コーラを奢ってやったというのに。

しかし、そんな話はどうでもいい。俺は嫌々ながらもこいつに言わなければならぬことがある。

「A、俺はな、体育祭でな」

「逃げるとか言わないだろうな？ もう逃げられないのによ？」

「ああ、そんなことは言わない。俺は、陽キャをぶっ倒しに行く。だから手を貸せ」

Aはゆっくりと立ち上がり、俺と同じ目線になって言う。

「……、ほう？ お前にはその気がないと思うていたが、その眼はあながち冗談や嘘の類いではなさそうだ。一体どういう風の吹きまわしだ、一から十まで懇切丁寧に説明しやがれこの野郎」

「簡単に言えば好きな人が来るんだよ馬鹿野郎」

「リア充に片足突っ込んだお前に教えることなんざ1つもねえよ裏切りやがってクソ野郎」

「クソ野郎って名前のブーメラン突き刺さってんぞクソ野郎」

なんでこんなにテンポよく言葉が出てくるのかがわからない。ただ1つだけ分かるのは、非常に残念で嫌なことに、こいつとの、この会話が楽しいときえ思ってしまったって俺がいるということだ。

「ってかさ、煉、お前なら他の人に言えばいいだろうが。俺に比べたら交友関係広いだろ、なんで俺なんだよ」

「自虐しながら泣くな。こっちがどうすればいいか困るだろうが」

泣きながら話すこいつは友人が俺ともう1人だけ。確かに俺の交友関係は狭いが、さすがに2人だけということではない。それに、一応は董子さんも入るようになったわけであるし。

「お前の取り柄ってなんだよ、A」

「なあ、そろそろそのAって呼ぶのやめろよな。俺にはれっきとした鋭って名前があるんだしよ。まあ、それはおいておいたとしても、俺は数学が出来るのと運動が並よりかは出来るって程度ぐらいだな」

「そう、その通りだろうが」

「は？ 長所がこれだけの男って思ってたの？」

「その通りだが？」

「畜生めえっ！ その通りすぎて返す言葉もねえわ！」

はいはいと、てきとうにあしらいながらも、こいつに頼み込む必要がある。

「お前のトレーニングに付き合ってもいいか？」

「もう一回聞くけど、なぜ俺だ？他にもいるだろうがよ。俺と違って、お前には俺にはない交友関係の広さがあるんだろう？」

「お前と違って、交友関係はまだ広いが、その中でもお前が一番運動神経がいいんだよ。だから、お前に頼んでんだ」

あと、気兼ねなく悪口も言い合える仲であれば、ストレス発散の手段も充分にあるだろう。

どんなにしんどくとも、パチユリーさんに見てもらうにはカツコ悪い姿を見せることができないのだ。

「ほう？ 俺のトレーニングは生半可じゃないが、付いてくれるのか？」

「キャラをコロコロ変えるのはやめてくれ。反応に困る」

「はーあー？ 俺らの会話はこんなもんだろうが」

「全くもってその通りなのが非常に残念だ。なんなら、お前と友達であるということはこの世に生を受けた中で最も忌避すべき事柄だったと後悔しているよ」

「そんななんもうどうでもいいだろ？ とりあえずリア充ぶつ倒す同盟結成だおら！」

意気揚々と、Aは立ち上がって拳を天に突き出す。

そういえば、Aのトレーニングについていく理由は覚えているだろうか。そのことについて、Aはリア充に教えることはないと言っ

いたような気はするが。

更には、リア充ぶつ倒す同盟と言うのであれば、リア充に片足突っ込んでる俺はぶつ倒される運命にあるということだ。

もしやこいつ、俺のこともぶつ倒すことを含めてそういう風な名前にしているのか？

……夜道には気をつけなければ。

28話 パチュリーさんは最近の主人公の帰りが遅いことに苛立ちがあるそうです。

「ただいま帰りました」

「おかえりなさい、煉」

……、おや？ パチュリーさんのいつもの言葉とは違うぞ？ 普段ならば、おかえり、なのに今日は、おかえりなさい。

もしかするとまた私がやらかしてしまったのか？

それに、今日は一段と不機嫌な声音でもあるご様子。

「ねえ、煉」

「はい、何か御用があれば何なりとお申し付けくださいませ」

「やっぱり変わらないわね、その変な口調は」

癖付いてしまっているものであるがゆえに、直そうとはしているのだ。しかし、この癖が全く手を放してくれないのだ。

「今日のパチュリーさんの髪型はポニーテールですか。本当に綺麗です。初めて出会った頃から変わらない美しさです」

「そう。魔法使いなのだから、姿や形が何も変わらないのは当然のことよ。私が聞きたいのは、そういう褒め言葉じゃないのよ」

話を逸らそうとするのは逆効果のようだ。ほんの少しだけ、パチュリーさんの眉間にシワを寄せさせてしまった。

このような失態をもう二度と犯さないように気をつけなければ。

そのような考えは今は脳の端の方に寄せておこう。ここからのパチュリーさんの話を、一言一句を、声を脳内に焼き付けなければならぬ。その上で、思考しなければならぬのだ。余計なものを考える余裕なんてものはない。

「最近、煉の帰りが遅くなっているような気がするのだけれど、私の勘違いかしら？」

「いえ、そのようなことはありません。確実に、私の帰りが遅くなっているのです」

「そうなのね、董子のところにも通っているのかしら？」

「私は董子さんのいる場所には、ここ2週間は行っていない。私は確かに董子さんのことは美人だと思つたことはあります。それは男の性だということは理解していただきたいところです」

「それで？」

「しかし、私の思いは全てパチュリーさんの方向へと向いています。なので、董子さんのもとにプライベートな理由で行くことはありません」

要約すると、推しはパチュリーさんだから他のキャラクターに行くはずがないということ。

実際、俺の推しはパチュリーさん一択だ。もし、ここで改宗しろと言われると死を選ぶ覚悟もある。

パチュリーさんは俺の放つた言葉に思わず戸惑いが隠せていなかった。やはり、純粋な好意にはパチュリーさんはまだ耐性がないようだ。しかし、それにつけ込んだやり口はしないことをここに誓おう。

「理由を素直に申し上げますと、非常に私がこっぴどくかしくなるのですが、それでも良いでしょうか？」

「ええ、いいわ。私にはこっぴどくかしくなる要素がないもの」

全くもって、パチュリーさんのおっしやる通りでございませう。

「えつとですね、体育祭の練習に励んでいます」

「あら、それならば良いことでしょう。こっぴどくかしくなるものも何もないじゃない」

「普段ならば、決して練習なんてものはしません。しかし、今回に限っては違います。今回に限っては、パチュリーさんがわざわざ見に来てくれる。それが今回の私の原動力となっているのです」

「ちよつと待って、それは初耳なんだけれど」

そう言つて、パチュリーさんは顔を真っ赤にして頭を抱えこむ。初耳もなにも、俺が言ったことは、ちようど今、この瞬間に初めて言つたことなので初耳に決まっているのだ。それなのに、どうしてそんな反応を見せているのだろうか。

「それって、私のためにはつてことなのよね?！」

「ものすごく簡略化して言えば、そういうことになります」

「だからそういうのを平然というのはーっ！」

パチュリーさんは現在、俺の何に対して怒っているのだろうか。

パチュリーさんの今の姿勢に合わせてしゃがみこみ、顔を上げると視線が自然と合うような位置をセツトする。

「パチュリーさん、どうしました？ 私、また何かやらかしてしまいましたか？」

「いや、だから……!？」

顔を上げたパチュリーさんと目が合う。次の瞬間には左頬からパチンという乾いた平手の音と鋭い痛みが襲いかかってきた。

パチュリーさんは、苛立ったような様相で、それ以降、その日は一つも口を利いてくださらなかった。

何か俺がやらかしてしまったというのは火を見るよりも明らかだが、何が原因だったのだろうか……。今の俺では全く分かりそうにない。

29話 パチユリーさんに嫌われているかもしれない
せん。

「おはー煉……、ってどうした、その頬。ひっぱたかれたような感じで
真っ赤じやねえか」

「Aかよ……、お前には関係ないだろ」

朝からこいつとの絡みは正直だるい。しかし、話しかけてくれるよ
うな友人が同じクラスにはAしかないというのが現実である。

「なんだよー、気になるだろー」

「うるせえ、勝手に自分で考えてろ」

「考えた結果、お前にいるとふんでいる彼女（仮）に平手打ちされたと
みたー」

「前半外れてるけどなんでわかんだよ」

こいつの言ってることは半分正解だ。

平手打ちをされてから1時間ぐらい経つのに熱を引かない頬を作
り上げたのは、彼女などではなくパチユリーさんだ。

昨日の帰宅後からずっと、パチユリーさんはご機嫌は斜めであっ
た。

十中八九、俺に責任があると思われるのだが、その問題点が見つか
らない。

そして、今日の朝に挨拶をしたら有無を言わずに1発パチーン。

もしかしなくても、パチユリーさんに嫌われたのだろうか。

「なんだよなんだよ、つい先日非リアの俺に対して、リア充オーラを
振りまきやがった煉くんはもうお別れの季節なんですか？」

煽りがキツイ。

いきなり朝からこいつと話すのは疲れるのだ。

「お前な……、いや、突っ込む気力もねえわ」

「おいおい、お前ツッコめよそれ。期待してたんだぞ？　ほんとうに
どうした。俺でもよければ相談乗るぞ？」

めったに見せない姿に困惑したのか、気持ち悪さを感じるほどに急

に優しくなる。

こいつに相談したところで何も変わらない。それどころか、パチクリーさんに関して、色々掘り出されそうだ。

「お前の手助けなんていらねえよ……」

「そうか、それならいつも通り煽るだけだが、それでいいのか？」

「むしろそっちの方がストレス発散になるかもしれない」

分かったと言うと同時に、煽りを再開するA。

だんだんとイライラが溜まってきたところで、1発腹パンを入れたところで、ある程度精神は持ち直すことができた。

こいつのおかげで復活できたことは腹立たしいことだが、一応は感謝しておこう。

なんだかんだでAは友人思いの非リアなのだ。

煉に朝会って早々にビンタとは、本当に悪いことをしてしまったと思っている。

しかし、無自覚であるとはいえ私への好意を包み隠さずに話す煉が悪い。

「私は何も悪くないのよ、私は……」

掃除や皿洗い程度ならば、最近になって人並み程度にはできるようになっていた。しかし、平常心を失っている今はひどくパフォーマンスが落ちている。

「……さすがの煉もこんな私を見れば、引くわよね」

羞恥しているところを見られる。それが嫌だった。しかし、それでもビンタしていい理由にはならない。

謝らなければいけない。そうは分かっているのだが、煉、いや人間に対して頭を下げることは自らのプライドが許さなかった。

けれども、平手打ちをしてしまったのは私であるから。いや、そのきっかけを作ったのは煉であるために私に非はない。しかし……。

そういった思考の堂々巡りをしていると、固定電話に『煉 携帯』と

文字が表示される。

電話というものは便利なものであるとは認めるが、びっくりするの
で唐突に鳴るのはやめてほしい。

「もしもし、煉かしら？」

『よかった、出てくれないかと思っていました』

まるで私から嫌われているような言葉を放つ煉に対して、何か苛立
ちのようなものは感じる。私だって、やりたくてあのような平手打ち
をするわけではない。

「それで、どうしたの？ 基本的に心配にならない限り電話しないと
のことだったけれども」

『いやまあ……、そうですね。こちらから謝らなければならないもの』
向こうのほうでカタンと音が鳴った。何が起きているかはわから
ない。しかし、誰かが煽るような声とその周囲から聞こえてくること
だけは分かる。

『だあつ、Aうっせえぞー！』

1度としても聞いたことがない、煉の荒っぽい声。

その声に微笑ましくなると同時に、少々の苛立ちが発生する。

『申し訳ありません、ちよつと話すには環境が。だから少し黙って
ろって！』

電話するのにここまで阻害されるとは、嫌われているのかいじられ
ているのか。どちらにしろかわいそうだ。

『では、帰宅しましたらお話ししたいことがありますので』

「ええ、分かったわ」

30話 パチュリーさんと仲直りがしたいです。

「ただいま戻りました」

「おかえりなさい、煉」

いつもの帰宅のあいさつでしかないが、俺とパチュリーさんの間には妙な緊張感があった。

平手打ちされた原因を俺は未だに分かっていない。

俺はどんな言葉をパチュリーさんにかければいいのか判断することができない。最初からそれができればどれだけ楽になることか。

「……あの、パチュリーさん」

緊張の走る空気に、口を開くことをためらいながらもなんとか第一声。まずここから、ここから……？

あれ、俺はどう言おうとしていたんだっけ。

あらかじめ、言おうと思ったことはメモしていた。Aにからかわれながらも台本を用意していたのだ。ああそうだ、手を動かした記憶はある。

しかし、肝心の中身を忘れてしまった。

テンパって台本をとばすってバカだろ、何やってんだ俺！

自分の馬鹿さ加減に自分で呆れてしまうが、なんとか言葉を続けなければ。

一言目からなんとも頼りなさすぎる言葉だが仕方がない。

ここからは即興だ！

「俺が思ってること正直に言います。俺、パチュリーさんに嫌われるようなことしました？」

「それは……」

「なるべく他人のことを考えようって思ってるんですけど、やっぱりパチュリーさんが何を怒ってるのか本気で分からなくて、自分でも頭が悪いことは自覚してます。だから、お願いします。パチュリーさんが何に対して怒ってるのかとか、聞きたいんです」

俺からすると些細なことだったとしても、相手からするととてもなく傷つけてしまっていたなんてことよくある話だ。特に男女、更

には俺とパチユリーさんは種族や住む世界が文字通り違う上、常人とは比較できないほど深い思考を巡らせているお方であらせられる。

そんな相手では、自分の思いもよらないところで傷つけてしまっている可能性の方が高いに決まっている。

「今後完全に無くせるかどうかってのは確約できないんですけど、無くすような努力はしますので」

「えっと……」

パチユリーさんは言い淀む。とても言いづらそうな表情を浮かべていた。

それでも俺はパチユリーさんが言葉を発してくれるのを待つことしかできない。

正座していた足の痺れがそろそろ限界を迎えそうになったところで、パチユリーさんは小さく口を開いた。

「あなたは何も悪くないわ」

……はい？ この御方は今なんとおっしゃいましたか？

私めの耳が腐り落ちていなければ、この榊原 煉は悪くないとおっしゃられておりましたか？

いやいや、そんなはずがない。だって私はパチユリーさんを怒らせた大罪人である。かのモリアーティ教授もびつくりの今世紀最大の犯罪者だ。

「いやいやいやいや、私の聞き間違いですよね？ いやいや、非があるのは私の方なんですから」

「煉には非がないわ。私が勝手に暴走して、勝手に八つ当たりしていただけ。だから」

この雰囲気は知っている。少しの配慮もできない低脳なこの俺よりもパチユリーさんが頭を下げることなんてあってはならない！

ならば、俺はこれをやるしかない！

「パチユリーさん！ 頭を下げないでください！」

俺は足の痺れなんてものを気にせず、バネのように真っ直ぐに突き出して、その勢いのままに伏せの状態を取る。

平身低頭、それは相手に謝罪や懇願する時に必要な姿勢。その最大

が土下座だ。

しかし、俺がしたのはその先。

土下座を超えた謝罪の領域、土下寝である。

身をこれ以上となく平らに伏し、膝をつく関係上少し浮いてしまう頭を確実に地につける。これこそが平身低頭の最奥。

それにこれだったら、パチュリーさんが頭を下げようとする場面を見ずに済む。

「あの、煉。何をしているの……」

おずおずといった感じでパチュリーさんが俺に声をかける。

「日本の伝統的な懇願の姿勢です」

「よく分からないけれども、馬鹿にされているような感覚があるわ」

「いえ！　そんな意図など一切なく！」

勢いよく顔を上げてみれば、よく分からない表情を浮かべているパチュリーさんと目が合う。何を言えば分からないままじっとしていると、馬鹿みたいだと彼女はコロコロと笑ってくださいました。

「ふふ、悩んでたことも馬鹿らしく思えてきたわ。けれども、私も悪いのだから、謝らせて。ごめんなさい、煉。私の勝手な行動で振り回してしまつて」

さつきまで彼女が頭を下げることをあそこまで拒んでいたのに、俺は一つも動けなかった。それもそのはずだ。パチュリーさんのすることであれば俺が止められるはずがない。

「これで仲直りということ、いいわね？」

俺はただ真つ直ぐに頭を動かす。

「それじゃあ、煉。紅茶を淹れてもらえる？」

「もちろん、喜んで」

そう言うのと、ずっと張り詰めていた緊張の糸がようやくやっとなり、疲れが一気に襲ってきた。

いつもは恐れ多いということをやったことがないが、一緒に紅茶をいただこうかなんて考えが頭によぎる。

今日もパチュリーさんはお疲れになっていることだろう。疲労回復効果があるフレーバーなんてものは……。

「あー、あの、パチユリーさん。紅茶の茶葉切らしてました……。麦茶でもいいですか……。？」
「……………むう」